



# 東日本大震災における 貢献者表彰の記録



公益財団法人

社会貢献支援財団

Foundation for Encouragement of Social Contribution

---

表紙の一本松は、2011年3月11日に起きた東日本大震災の巨大な津波により、なぎ倒された岩手県陸前高田市の7万本の高田松原で、ただ1本だけ倒れずに残った樹齢260年以上といわれる「希望の一本松」、「奇跡の一本松」(写真：高橋巧氏)です。

一本松は、保存作業のために2012年9月に切り倒され、保存加工の後、震災発生から2年となる翌年の3月に再び復興のシンボルとして戻ってくる予定です。

戻って来た一本松は、地域の復興の歩みを見守り続けることでしょう。

---

# 東日本大震災における 貢献者表彰の記録



公益財団法人

社会貢献支援財団

Foundation for Encouragement of Social Contribution

まえがき .....	4
式次第 .....	5
会長挨拶（日下 公人） .....	6
選考委員挨拶（内館 牧子） .....	8
受賞者代表挨拶 （株式会社八木澤商店 会長 河野 和義） .....	10
表彰の概要 .....	21
選考委員プロフィール .....	22
受賞者紹介 .....	25
世界一ひとに優しい国をめざして（評議員：中島健一郎） .....	273
資料 .....	297

東日本大震災により、亡くなられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

また被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

本財団は人びとや社会のために尽くされた皆様を表彰申し上げ、社会貢献活動の普及と社会の発展に寄与することを目的に表彰事業を行っている公益財団法人で、昭和46年設立以来11,913件の皆様を表彰させていただいております。

平成24年度の社会貢献者表彰は、昨年3月11日に発生した未曾有の東日本大震災（震災）で、救難活動をされた方々を「震災における貢献者」として当財団が表彰、そして震災で支援活動をされた芸能人の方を「被災地で活動した芸能人ベストサポート」として日本財団が表彰申し上げるところとなり、表彰式典を共催により開催させていただきました。

後援を賜りました内閣府・総務省・外務省・文部科学省・厚生労働省・国土交通省、そして事業の助成を頂きました日本財団はじめご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

さて、震災における貢献者表彰につきましては、津波の中での人命救助や避難誘導、支援物資の提供や配給、瓦礫の撤去やヘドロの除去、被災者やボランティアへの支援、避難所や仮設住宅での医療、救護、障害者への支援、避難者の受け入れ、被災地の子どもたちへの学習支援、被災地でのスポーツイベントや療育キャンプの開催、被災地のペット等の保護活動等々の候補者の中から、選考委員により128件の方々を選考させていただきました。表彰の候補者の皆様に推薦下さいました推薦者の方々に厚くお礼申し上げます。

表彰式典は、平成24年5月1日（火）帝国ホテルで開催し、ご来賓等700名程の皆様のご出席を賜り、受賞者の方々に表彰させていただくとともに副賞の日本財団賞をお贈りさせていただきました。

さて、被災地では悲痛な思いを抱え、苦しい生活を強いられたまま、震災から2年目を迎えています。当財団は、このような中で私達が先ず出来得ますこととして、震災における貢献者の表彰を実施させていただきました。そして受賞者の方々が活動されたその時の手記と当財団評議員の中島健一郎氏の受賞者の取材記事等により、記録集としてまとめさせていただきました。

受賞者の方々の勇気ある活動を顕彰するとともに、当財団の表彰事業につきましても、今後ともご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

公益財団法人 社会貢献支援財団

## 第1部 東日本大震災における貢献者表彰 15:00～

受賞者入場

黙祷

大倉正之助氏による三番叟の演奏

開会の辞

会長挨拶

選考委員挨拶

受賞者表彰

東儀秀樹氏による「ふるさと」「尊い記憶 遥かなる平泉～世界遺産へ」演奏

受賞者表彰

受賞者代表挨拶

開会の辞

主催：公益財団法人 社会貢献支援財団

後援：内閣府 総務省 外務省 文部科学省 厚生労働省 国土交通省

会場：孔雀の間（東）

## 第2部 感謝の会 被災地で活動した芸能人ベストサポート 17:00～

共催：日本財団

公益財団法人 社会貢献支援財団

会場：孔雀の間（西）



## 会長挨拶

公益財団法人 社会貢献支援財団

会長 日下 公人

当財団と日本財団で共催となりました「東日本大震災における貢献者表彰」にご参列くださりましてありがとうございます。

先ほど黙祷を捧げましたけれど、沢山の方が亡くなりました。沢山の方が災害に立ち向かい、そして今も復興に向けて頑張っているんですよ。大きな災害を受けましたが、私たちはそこに日本人の底力、心の繋がり、美しさなどを発見することが出来まして、これが未来への希望となっております。

これは日本だけではなく、私の友人でパリに30年暮らしている男がいますが、大震災の後、パリの街を歩くと「お前、日本人か？頑張れよ。われわれは日本が好きなんだからな」と全く関係のない何人もの人からそういわれた、全然そうとは思っていなかったのが大変驚いたと申します。それを受けて、ニューヨークに30年住む友人が「いや、俺も一緒だ、アメリカの田舎を周ってもそういわれる」と日本人は実は愛され、実は尊敬され、そして今回の事について世界の人はわかってきているのだ、そう思ったとっておりました。しかし、こういう話は日本のマスコミはお好きでないと見えて、新聞、テレビにはほとんど出て参りません。でも、それはマスコミの方が間違っていると思っております。

先ほど、今回の表彰で受賞される128件の方々が順番に歩いて登場なされ、そしてまた歩いて帰られるお顔、歩き方を拝見いたしまして、何という立派な人たちだろうと思いました。自分がやったことの価値、やりたかったけれどもやれなかったこと、も全部含めて考えつくした深い表情を見て、こういう人は本当に世界でも少ないのかもしれない、だけど日本ではたくさんいらっしゃるんだな

と、同じ日本人である自分も励まされ、また勇気を得、皆様に感謝し、感動いたしました。

これが世界ではどういう風になるかを考えますと、アメリカでは皆さんのような方は、ヒーローとかヒロインと申します。「英雄」ですね。みんなのために立派なことをした英雄ですが、「それは誰が表彰するんですか？誰が決めるんですか？」について日本とアメリカはだいぶ違うんですね。

例えば「大統領」は表彰しません。それは、民主主義だから国民の方が大統領より偉いから、大統領が国民に勲章を授けるということはありません。軍人にだけいたします。そこが日本と違います。

ヨーロッパではどうかといいますと、ヨーロッパでは千年のキリスト教の歴史がありますので、すべては神様に捧げる、神様に捧げるような活動が出来たことを自らの誇りとし、また神に感謝するんですね。教会が神様へ推薦すると、神様がよしよしという声が聞こえたと、神父さんか牧師さんが言って下さる、というのがヨーロッパです。

翻って日本ではどうか、というと、国家でもないし、神様でもない、仏様は何もかも飲みこんで、そんなにいちいち区別を立てることはない、万霊は平等で死ぬのも生きるのも一つの如しと、そのように教えているようでございます。

私たちはこの日本列島の上で、まずは二千年、もしかしたら、五千年間同じ人たちが同じ日本語を話して、異民族が大陸から進入して支配者になるとかを経験せず皆で仲良く暮らしてきました。その間には道教も入ってくるし仏教も入ってくるし、儒教もキリスト教もいろんな宗教が入ってくるのを排撃することなく、自分が気に入ったところだけを採用して、そして全部混ぜて「日本教」とでもい

うべき心を作って、それを共有して暮らしている。

これが欧米人にはわからないらしくて、日本は遅れているとか、まだ封建的だとか、野蛮だとか、すべてそれを脱却しなければいけない、それはおれが教えてやるというような大ぼらを吹きまして、うっかり感化された日本人もたくさんおります。

これは私の考えではありますが、世界は根本に何やら間違いがある、近代という時代にも、欧米の文化にも根本に偏ったところがある、そのためご承知のように世界中どの国も、どこの国の大統領も首相も何をしたいかわからない。失業が増え、外国から難民が入ってきて、犯罪が増えて、金持ちは益々金持ちになって中流階級はもはや減びてなくなるようになっている。下層階級の人ばかりが増えているが、その人たちにはあまり希望が無い、そういう世界になりつつありますから、そんな目で日本を見ると、何という素晴らしい国だろうと思うが、どうしてそんなに良い国になるのかはわからない。それは日本人が言わないからです。日本人はもう千年もこれでやっていますから、いまさらどう口で言っているかわからない。だけど、ここに住んでみれば素晴らしい住ごちがありますよと思っています。

日本に帰化する時の帰化税を一人一億円取ってはどうか。一億円払ってでも日本人になって日本に住みたいという人がこれから出てきます。となれば、自分は日本人だ、このパスポート一億円だ！って、そういうことを誇りに思う人もいるかもしれません。でも本当の日本人の底力はそういうところではないんですね。本日お集まりの128件の皆さんが、国を代表する宝なんですね。本当にそう思っております。

災害復興について一言いいますと、フランス人で、フランソワ・ケネーという経済学者がいます。産業革命が始まったばかりのころ、アダム・スミスの少し前に活躍した経済学者です。彼は、7年戦争でベルギーやオランダの羊毛工業で大変栄えた町が焼野原になるのを見た。町は焼かれ、機械は壊れ、もう駄目だろうと思ったが、その町がなんと見る見るうちに復旧した。希望に燃えて人々は働き、ベルギー、オランダの羊毛製品はヨーロッパ中に高く売れるようになった。それを見て彼は書いていますが、焼野

原になる大災害を見るともう駄目かと思うが、駄目になったのは実はハードウェアばかりである。家は焼け、工場は潰れたが、そういうものは、償却資産といって、もともと寿命があるわけで、寿命が20年のものは、10年経ったら半分になっている、だからぜんぶ焼けてもハードウェアの損害は押しなべて考えれば、半分だと。しかし、ソフトウェアは全部残っている。その町の評判、その町の信用、その町の人たちが持っている技術、助け合いの精神、出来上がった製品の素晴らしさはヨーロッパ中が覚えている。ハードウェアの損害は見た目には凄いが、それは半分であって、ソフトは全部残っている。もしかしたら、大掃除をして前より良くなる。だから大災害による損害は案外軽い。それより怖いのは、人の心が崩れることだ。道徳とか、助け合いの精神とか、もっと頑張ろうとか、子どもを大事に育てようとか、そういう心が残っている限り、復旧は案外簡単なものらしいと。

皆様のような、そしてまたその後が続こうとする日本人がいる限り東北大災害の傷は浅い、世界がまた助けてくれる、日本もまた頑張る、そう思っております。

本日は表彰式なんて書いてありますが、表彰するなどは欧米の神様取りの人が使う言葉でありまして、日本の心ではないと思います。日本の心としては、皆様がなさった立派なことは、実は私たちだってそうならばそうすることで、皆さんもそう思っているから、自分一人だけを表彰しないでください、といって辞退する方が毎年いらっしゃいます。日本人は誰でもこうなればこうするんだ…。そういう高みに達している日本人でございますから、これは表彰ではなくて、日本人全体が皆様方のその働きに感動し、また自分も後に続こうと思っていることを何かの形に残して後後に伝えるために、今日こういうイベントをしているのだと思っております。

このイベントは日本財団の資金援助を受けております。日本財団は昭和46年頃からこういうことをしてきたわけでございます、この仕事をますます発展させたい、皆さんも私たちが頑張っていきたいと、そう思っております。



## 選考委員挨拶

脚本家  
公益財団法人 社会貢献支援財団

副会長／選考委員 内館 牧子

塩川正十郎選考委員長より申し付けられましたので、私、内館牧子からひと言ご挨拶申し上げます。

まず、128件の受賞者の皆様のご活動に対し、心から感謝申し上げます。

皆様は東日本大震災の中で、ご自身の危険や命を顧みずにくさの方々の命を助け、また、被災地に多くの励ましをしてくださいました。その活動は、眠ることや、食べることさえ忘れるような、大変なものであったと伝わっております。そればかりか、皆様は現在までずっと続けてその活動をしていらっしゃると思います。ご自分の生活や仕事がおありになるでしょうに、その中で、それがいかに大変なことか、本当に身に染みてわかります。心から重ねて感謝申し上げます。

私は育ちは東京ですが、父が岩手県の盛岡市出身で、母が秋田市の出身で、私自身は完全に東北の人間です。そして、学校は仙台で学びました。ですから、震災がどのぐらいに大変なものであったかということは、東北の住民レベルで刻一刻と私の下に届いて参りました。

今、東北大学で相撲部の総監督をやっておりますが、大切なコーチも亘理で、津波により失いました。摺り足から鉄砲、四股に至るまですべて基礎から学生に教えてくれた、元力士の大切なコーチでした。そういった惨状を思い知らされているだけに、皆様がどれほど私心を捨てて活動してくだ

さったか、本当に胸に響きます。

今回、ご推薦いただいた皆様の活動を大きく分けると、ひとつは、巨大津波の中での人命救助、そして避難支援があげられます。二つ目は、震災後の避難者への生活支援、そして医療支援があげられると思います。また、三つ目として、震災後、ボランティアとしての復旧支援に携わっている方も多くおられます。これは、このゴールドウィークも全国からたくさんの方が被災地にボランティアとして入ってくださった、ということテレビが報じているとおりです。そして、取り残された動物支援にも随分力を頂きました。本当にありがとうございました。

これらの活動は、家族を失い、家を流され、仕事を失くし、ご自分も生きる気力を失っていたであろう人々をどれほど力付けたかわかりません。それはおそらく、ここにいらっしゃる128件の皆様が想像なさっているより遥かに大きな力をもたらしたと思っています。

実際に私自身、現地でそういう声をたくさん聞きました。

重ねてお礼申し上げたいと共に、ここで皆様をお願いしたいことが二つございます。

ひとつは、活動をどうぞ今後も長く長く続けて頂きたいというお願いです。往々にして大きな災害でも事件でも、刻々と風化していきます。時と共に色褪せてしまいます。この震災から5年後、10年後に人々が「そ

ういやあ、震災とかあったよな」「東北って損したよな、俺もう関係ないけどさ」ということになりかねないのです。私は、それをすごく危惧しております。東北が再生するその日まで風化せぬよう、そしてこれは日本全国の問題であり、全国民の問題なのだということ、皆様のお力で是非徹底させて頂きたいと願っています。

もう一つのお願いと申しますのは、この日本財団からの副賞の賞金は、いつもご自分のためにお使い下さいと申し上げておりました。曾野綾子元委員長がいつも仰っていたことです。そして、歴代の委員長も、皆様は良いことばかりをなさっていたから、なんとかこの賞金だけは自分のために、旅をするとか、スタッフと飲みに行くとか、好きなようにお使い下さい、ということを仰っていたわけです。

私も、それによって鋭気を養うということは大賛成なので、今回もそう申し上げたいのですけれども、できれば、今回の賞金だけは、なんとか復興支援のためにお使いいただきたいと願っております。と申しますのも、支援活動をされている方々は、たくさんいらっしゃるのに、皆様に差し上げることが出来ません。その中から、ここにいらっしゃる128件の皆様を選考させて頂いたわけです。

ただ、選考から漏れたり、目に留まらなかった方々も、その身を投げ出して一生懸命に復興のために力を尽くしたということは同じであり、また助けられた人々の感謝というのも同じであろうと思います。そう考えます

と、賞金を支援活動にお使いいただければ、選考から漏れたり、目に留まらなかったり、という同志のすべての方々に差し上げたことになるのではないかと、選考委員会としては考えました。

そうならば、本財団として、そして選考委員として、これほど嬉しく、またありがたいことはありません。今後も全国民が力を合わせて復興を目指すために、皆様のリーダーとしてのお力に非常に期待すると同時に、本財団もそれを学び、力を尽くして参りたいと思います。

本当に今日はありがとうございました。心から感謝申し上げます。



## 受賞者代表挨拶

株式会社 八木澤商店

会長 河野 和義

ご紹介いただきました、岩手県の陸前高田、八木澤商店の会長の河野でございます。

二百年の歴史がたった6分間で何にもなくなりました。

私ども八木澤商店は、残念ながら、一時は全員助かっていたのですが、一人だけ消防団活動で、水門を閉めに行き亡くなりました。

残った者で、全国から頂いた支援物資を、今までの二百年の御礼のつもりで、支援物資が行き届かない所へ届けようという運動をいたしました。その時、私たちは基本方針に三つを掲げました。

ひとつ、生きる。

ひとつ、共に暮らしを守る。

ひとつ、人間らしく、魅力的に。

そういうことで、活動したのですが、今日の表彰を受けた方々の立派な活動を聞いていて、私がこんな代表の挨拶をしてよいのだろうか、ただ地域にとって当たり前の事をしただけなのに。

しかし、私はこの震災で価値観を変えました。今まで「合理的じゃない」あるいは「高い」とか「もうからない」とか、そういうことで挑戦しなかったことに、これから挑戦していきたいと思っております。それは自然エネルギーで、自分たちで、全部は無理で

も少しでも自分たちでエネルギーを作り出そう、電気を作り出そうという気になりました。

私は、会社は一人の解雇もせずに、息子に社長を譲りました。これから私は地域の事を考えていきたいと思っております。孫やひ孫に顔向けできない地域は作れない。

これから、私どもの地域で読まれている詩を読ませて頂きます。

おらあやっぱりここがいい  
 大津波で全部なくなっても  
 地震でぼっこっさされても  
 やっぱこの街が好きだ  
 やっぱここに住みたい  
 ここが一番だ  
 二度と同じけしぎあ見られねあども  
 二度と同じ建物あただねあべども  
 おらどの目にあしっかり焼きついでいる  
 わっせるごどねあ あの景色  
 おらどの街  
 やっぱここがいい

ありがとうございました。

## 表彰式









記念写真



- 後上勝俊
- 有限会社 マリンメカニック
- 今崎真幸
- 陸前高田市立 広田中学校
- 菅野次郎
- 津田 廣明
- 梶原勝雄代理
- 梶原英和
- 細川繁一代理
- 細川浩美
- 崎山文衛代理
- 崎山ひろみ
- 小松幸司代理
- 小松舞子
- 佐藤善文
- 石川拓真
- 江刺家光彦代理
- 水野都飽
- 菅野智之代理
- 菅野一則
- 平山一夫代理
- 平山美津枝
- 鈴木勝代理
- 鈴木きよ
- 遠藤兼光代理
- 遠藤怜子
- 二瓶幸夫代理
- 二瓶貞子
- 佐藤充代理
- 佐藤直宏
- 名取市消防 関上分団
- 三浦裕一
- 宮古市消防団 山下修治
- 大槌町消防団 第二分団
- 小國峰男
- 吉田浩文
- 岩崎順一
- 安住紀人
- 北田駿代理
- 千葉哲也
- 横山優士
- 遠藤新悟
- 瀬戸裕保
- 尾形拓海
- 大槌保育園
- 八木澤弓美子
- 瀬戸 勲
- 姫路聖マリア病院 山中登子
- 関西つごい病院 田中一美
- 宮城社会保険病院 石井元康
- 宮城県立 がんセンター 片倉隆一
- 名取市医師会 丹野尚昭
- 渥美広実代理
- 渥美弘子
- 石巻市医師会 舩 眞一
- 宮城厚生坂 総合病院 今田 隆一
- 鎌田真人
- 木村光善
- 太田幸男
- 永井 舞
- 志田書昭代理
- 上野恵子
- 磯谷與蔵
- 袖野勇代理
- 葉澤紀芳
- 福島県警医会 中村雅英
- 村岡正朗
- 葛 但寛
- 本郷忠敬代理
- 本郷節子
- 岸田智子
- 井坂 晶
- 日下会長
- 木住野耕一
- 菅野和治
- 石井 正
- 佐々木文秀
- 小松孝男
- 笹原政美代理
- 笹原麗子

- こども緊急サポート ネットワークくしま
- 佐藤由紀子
- 宮城県自衛隊連合会 松山昭雄
- 大原自治公民館等 連合会
- 菅原五三男
- 蓮葉まちづくり コミュニティせえね
- 小林悦子
- 宮城県隊友会
- 大越雅行
- 復興の湯 プロジェクト
- 高萩善夫
- 九戸村山友会
- 小笠原耕悦
- 南三陸ホテル観洋 阿部憲子
- ひまわりの家 般若よし子
- JDFみやぎ 支援センター 株木孝尚
- 名取市役所 アマチュア無線クラブ
- 中澤哲郎
- 八木田文子
- 愛甲香純
- 梅田祐一郎
- 高橋 實
- 株式会社八木澤商店 河野和義
- 災害子ども支援 ネットワークみやぎ 小林純子
- 宮城エキスポレス 株式会社 宇都宮博行
- 相馬はらがま 朝市クラブ
- 高橋永真
- 釜石市立大平中学校 及川 深太
- 馬場照子
- 佐藤一彦
- 菅野 修
- 佐藤 宏
- 遠藤一彦
- 鈴木 廉
- 鈴木 みゆ
- 金野光晃
- 堀内ツグエ
- 小國昭正
- 北村泰秀
- 駒場恒雄
- 早坂本勝
- 中島 響
- 日下会長
- 佐々木平一郎
- 太田明成
- CITなすけっと 及川 智





## 第一部 東日本大震災における貢献者表彰の概要

### 1. 募集告知

平成23年9月中旬より、新聞等への告知広告・記事掲載、ダイレクトメール、当財団ウェブサイトにて。

### 2. 功績対象 東日本大震災における救難活動

- ・東日本大震災に際し、身命の危険を冒して救助、救護などに尽くされた方（当該の活動により亡くなられた方を含む）。
- ・東日本大震災に際し、身命の危険を冒して2次的な災害や事故などを未然に防いだ方（当該の活動により亡くなられた方を含む）。
- ・東日本大震災に際し、混乱する状況のなかで復旧、復興に尽くされた方。

### 3. 候補者について

- ・候補者は、年齢・職業・性別・信条・国籍などの制限はない（但し、職務上の救援・救助活動は除く）。
- ・平成23年3月11日以降の活動を対象として、当該の活動により亡くなられた方を含む。
- ・原則として、ご本人（故人の場合はそのご家族）に受賞式典へご出席いただく。

### 4. 選考について

選考委員会開催日：平成24年2月21日 第一ホテル東京  
外部有識者による選考委員会が、受賞者を選考する。尚、選考の過程は公表されない。

### 5. 受賞者

受賞者：128件  
応募総数：159件

### 6. 表彰式

開催日：平成24年5月1日 帝国ホテル  
受賞者の皆様には表彰状、副賞として日本財団賞（賞金）、記念品を授与する。

## 第二部 東日本大震災における被災地で活動した芸能人ベストサポート表彰の概要

「被災地で活動した芸能人ベストサポート」表彰は別途、日本財団で同表彰の選考委員会の選考により、伊勢谷友介、EXILE、加藤登紀子、小林幸子、コロクケ、坂本龍一、サンドウィッチマン、杉良太郎、伍代夏子、中村雅俊、はるな愛の各氏が受賞した。また表彰式典は当財団と共催により行われた。

## 選考委員プロフィール



元財務大臣  
塩川 正十郎 選考委員長

1921年生まれ  
学校法人 東洋大学総長ほか  
著書：「佳き凡人をめざせ」「ある凡人の告白」ほか多数



東京ボランティア 市民活動センター所長  
山崎 美貴子

1935年生まれ  
社団法人全国保育士養成協議会 会長 ほか  
著書：「社会福祉援助活動における方法と主体」「ヒューマンサー  
ビス-現代における課題と潮流」(監修) ほか多数



脚本家  
内館 牧子

1948年生まれ  
東京都教育委員会 教育委員ほか  
脚本：「ひらり」「てやんでえッ!」「私の青空」「毛利元就」ほか  
多数



ノンフィクション作家  
吉永 みち子

1950年生まれ  
著書：「気がつけば騎手の女房」「性同一性障害」「26の生きざま」  
ほか多数



元国税庁長官  
大武 健一郎

1946年生まれ  
関西大学客員教授ほか  
著書：「平成の税・財政の歩みと21世紀の国家戦略」「税財政の  
本道一國のかたちを見すえて」ほか多数



公益社団法人 日本将棋連盟 会長  
米長 邦雄

1943年生まれ  
著書：「人間における勝負の研究」「人生一手の違い」「幸せに  
なる教育」ほか多数  
(平成17年から、当財団の選考委員としてご協力いただきました米長委員は、同24年12月18日逝去されました。ご厚情に感謝申し上げますとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます)

## 受賞者紹介

## 受賞者紹介

佐藤 善文	30	鳥越 紘二	88
小松 幸司	32	財団法人 宮城厚生協会 坂総合病院	90
故 佐藤 充	34	社団法人 石巻市医師会	92
故 二瓶 幸夫・故 遠藤 兼光・故 平山 一夫・故 鈴木 勝	36	一般社団法人 名取市医師会	94
故 菅野 智之	38	地方独立行政法人 宮城県立病院機構 宮城県立がんセンター	95
故 石川 拓真・故 江刺家 光彦	40	社団法人 全国社会保険協会連合会 宮城社会保険病院	96
故 梶原 勝雄	42	独立行政法人 労働者健康福祉機構 関西ろうさい病院 看護部	98
崎山 文衛	44	医療法人財団 姫路聖マリア会 姫路聖マリア病院 看護部	100
有限会社マリンメカニック	45	岸田 智子	102
細川 繁一	46	本郷 忠敬	104
津田 廣明	48	佐々木 文秀	105
陸前高田市立広田中学校	50	井坂 晶	106
後上 勝俊	52	木住野 耕一	108
大槌町消防団第二分団	54	菅野 和治	110
名取市消防関上分団	56	石井 正	112
宮古市消防団	58	小松 孝男	114
吉田 浩文	60	笹原 政美	116
大平 翔太	62	葛 但寛	117
岩崎 順一・安住 紀人・北田 駿・横山 優士・遠藤 新悟	64	村岡 正朗	118
瀬戸 裕保	68	福島県警察医会	120
櫻井 京子・尾形 拓海	70	宮城エキスプレス株式会社	122
社会福祉法人 大槌福祉会 大槌保育園	72	名取市役所アマチュア無線クラブ	124
瀬戸 亘	74	被災障害者総合支援本部 JDF みやぎ支援センター 日本障害フォーラム JDF	126
永井 舞	76	被災地障がい者センターみやぎ CIL たすけっと	128
磯谷 與藏・袖野 勇・故 志田 壽昭	78	NPO法人 ひまわりの家	130
渥美 広実	80	南三陸ホテル観洋	132
太田 幸男	82	九戸村山友会	134
木村 光善	84	復興の湯プロジェクト	136
鎌田 真人	86	株式会社八木澤商店	138
		災害子ども支援ネットワークみやぎ	140
		公益社団法人 隊友会 宮城県隊友会	142
		NPO法人 相馬はらがま朝市クラブ	144

釜石市立大平中学校	146
巨理いちごっこ	148
NPO法人 まごころサービス福島センター（子育て支援部門） こども緊急サポートネットワークふくしま	150
室根町自治会連合会	152
大原自治公民館等連合会	154
蓬萊まちづくりコミュニティぜえね	156
高橋 實	158
駒場 恒雄	160
梅田 祐一郎・愛甲 香純	162
八木田 文子	164
北村 泰秀	166
小國 詔正	168
堀内 ツグエ	170
佐藤 一彦	172
菅野 修	174
佐藤 宏・遠藤 一彦	176
鈴木 廉・鈴木 みゆ	178
金野 光晃	180
太田 明成	182
佐々木 平一郎	184
中島 響	186
早坂 本勝	188
片品村	190
片品むらんていあ	192
社会福祉法人 福岡市身体障害者福祉協会	194
株式会社 山本清掃	196
石塚観光	198
日本笑顔プロジェクト	200
つるがしま東日本大震災復興支援プロジェクト	202
NGO MIRA I ～魅来 <small>みらい</small>	204
埼玉はすだ支援隊	206
特定非営利活動法人 川口市民防災ボランティアネットワーク	208

全国オートバイ協同組合連合会	210
リスマイルプロジェクト	212
地域ネットワーク推進会議 たかつ災害ボラネット	214
復興ボランティアタスクフォース	216
移送奉仕団体「移送さいわい」	218
災害ボランティア・チームふくい	220
全国訪問ボランティアナースの会 キャンナス	222
特定非営利活動法人 ほこほコネクト	224
埼玉県赤十字災害救援奉仕団	226
特定非営利活動法人 碧い海の会	228
特定非営利活動法人 セカンドハーベスト名古屋	230
UT-Aid 東大ー東北復興エイド	232
災害復興支援コーディネーター 蓮笑	234
一般社団法人 みんなのとしょかん	236
ヤフー株式会社	238
阿部 久・阿部 恵美	240
黒岩 和穂	242
大谷 哲範	244
石見 喜三郎	246
Hendrik Hubert Maria Goncalo Lindelauf	248
松永 鎌矢	250
岩井 慶次	252
藤野 裕	254
広瀬 敏通	256
折尾 仁	258
中村 真菜美	260
今村 久美	262
加藤 秀視	264
NPO法人 犬猫みなしご救援隊	266
ハートtoハート	268
特定非営利活動法人 エーキューブ	270





## 佐藤 善文 (77歳/宮城県東松島市)

震災が起こる10年前から、津波に備えて高さ30mほどの東松島市のご自分の裏山に私設避難所を造成。預金と年金を投じて、時に変わり者と言われながらも、結果70名もの地域住民の命を救い、備蓄した燃料と食料で救助が来るまでの2日の間、全員が暖をとり過ごすことが出来ました。

●推薦者 公益財団法人 社会貢献支援財団●

今回、由緒ある社会貢献者表彰の受賞の栄に浴し、本当に心より感激いたしております。

私自身、海に近い場所に自宅があり、平成11年頃に津波から人命を守るには高い場所になければならないと心を入れて考え、JR仙石線の野蒜駅近くでタクシー会社を経営しておりましたが、避難所を作る自由な身体と時間が欲しいと息子に経営を譲りました。

そして、自宅より100メートルほど離れた小高い岩山(30メートル程の高さ)に、全く人の手を借りずに藪を刈り、柱などの資材を担ぎ上げ、頂上には海の見える展望台、

小屋、あずまやを作り、水やプロパンガス、コンロ、石油ストーブ、ある程度の食料も備えました。

「災害避難所(津波)」の案内板も立て、岩を削り、四方の斜面から登れるように階段を作りました。平成12年には、桜、梅を植え、山野草や小鳥の声を聞き楽しむことができるようにしたところ、書家である私の叔父が、ここを『喫茶去苑(きっさこえん)』と名付けてくれました。作業中、「大津波なんて来ないよ」と数人に言われましたが、そんなことは気にもなりませんでした。

そして平成23年3月11日午後2時46分、



東屋

大地震が発生、大津波の襲来によって生命、住宅、雄大な景観など多くの大切なものを一瞬にして奪い、今までの当たり前ではあり得ない変貌の時が突然やってきて、学校や指定避難所、避難途中で多くの犠牲者が出ました。そのような時、『喫茶去苑』は避難所として本領を発揮し、70人余りの命を守ってくれました。

今回のような、又はより大きな災害が起きた時に、より多くの尊い命が助かることを願い、現在は『喫茶去苑』のすぐ傍らの地にも新たに手を加えております。

去年の秋に鎮魂と復興の「手あわせ桜の活動」とも協力し、趣旨に共鳴いただいた長野



植樹された桜の木

市戸隠の大山桜を整備中の場所に15本ほど植樹しました。今春さらに15本、最終的には60~70本の桜を植樹予定です。

近隣住民は勿論、観光で訪れた人々もすぐに避難できる場所に、そして春には桜が咲き誇り、多くの犠牲者の御霊と遺族の悲しみを慰め、今後生きていく者たちには復興のシンボルの場所になりますように、願いを込めて作業していくことが今後の私のいきがいになりそうです。



住民が避難した小屋



山につづく手づくりの階段



## 小松 幸司 (27歳 / 岩手県陸前高田市)

陸前高田市で津波警報が出る中、近隣に車いすの夫を連れての避難をあきらめた老夫婦がいることを知り、津波が堤防を越えていたにも関わらず、男性を背負い夫人を伴って間一髪救出されました。

●推薦者 佐藤 咲恵●



駆け昇った坂



この階段も駆け昇った

3月11日、私は仕事のため陸前高田市広田公民館付近にいました。高台からの「早く逃げろ!」という声で津波が近くまで来ていることに気づき、一度は高台に避難しました。

そこで、足の不自由な夫を必死に助けようとする奥さんを見つけ、すぐに助けに走りました。波が迫っているのが分かっていたので、早く助けなければという思いから男性を背負い、必死に高台につながる坂を駆け上がっていきました。

あまりにも必死だったので今までに経験したことがないくらい息が上がり、周りの様子をみる余裕はありませんでしたが、「あ

りがとう」という声を何度も掛けられたことは覚えています。その時は、自分もですが、助かって良かったの一言でした。同じ広田の人の役にたてて本当に良かったと思います。

現在、復興に携わる仕事をしています。震災から1年経ちましたが以前のような広田に戻ることはできなくても、活発な声がたくさん聞こえる元気な広田町になるよう力を合せて務めていきます。

受賞させていただき、ありがとうございます。地域に貢献することが出来たことをとても嬉しく思っています。



男性をおぶって逃げた場所



一端避難したもののここに老夫婦がいたため助けに向った



避難した高台には仮設住宅が建てられた



故 佐藤 充 (享年55歳/宮城県牡鹿郡女川町)

女川町の水産加工会社の役員の佐藤さんは、会社の中国人研修生20名を避難させた後、救助活動を継続するなかで、津波の犠牲となりました。

●推薦者 公益財団法人 社会貢献支援財団●

宮城県の女川町は、東日本大震災により、死者474人、行方不明者180人。約1,490人が避難した。私たちはこの震災により水産工場と自宅、そしてなによりも私の右腕ともいえる弟（専務・充）を失ったことが残念でならない。

地震もさることながら恐ろしい津波だった。津波の高さが、石巻が10m程、女川や陸前高田は地形によるものか17~8m、会社は14~5mの高さの所にあったが、飲み込まれた。

報道では、弟が津波の中で、当社の中国人研修生（20人）を、道路を隔てた後ろの神社のある高台に避難させたようになっているが、弟は地震発生後すぐに研修生や従業員、会社の車を神社と神社の下の道路に避難、移動させた。

研修生は、「専務さんは、避難する際も慌てず、いつも通り優しく避難させてくれた。」と言っていた。

神社の鍵をあげた弟は、そこから2台の車に分乗して避難する両親と私を見送ってくれた。津波が迫り来る中での避難ではあるが、わずかの時間的な余裕があったと思う。津波により車は流されたが、研修生は無事だった。

それがどうしてまた弟は下に戻り、津波にさらわれたのか判然としない。弟は消防団員でもあったことから、高台からまた下に降りて救助活動をしようとしたのか。研修生が、高台の神社から写真を撮っている時に、偶然にも民家の屋根にしがみついていた流されていく弟の姿を発見し、弟に向かって「専務！専務！」と叫んだという。私はそ

の写真を見て、弟が映っているようにも思えたが、見るに絶えず確認をする気にもなれなかった。

研修生は、中国大使館から車を用意され、新潟、福井、石川の空港から帰国した。

この研修生の撮ったものが、パソコンを通じて中国で流され、弟が英雄のように称賛されるきっかけとなった。

社員の中から犠牲になったのは、弟と一人の機関士で、弟は英語と中国語を少し喋れたこともあり、夜も研修生に日本語を教え、亡くなった機関士が研修生の世話役をやっていた。二人とも研修生と親しかった。

弟は1ヵ月後に会社近くのガレキの下から、機関士は同じ頃、海中から夫々遺体で発見された。

研修生の受け入れは、12~3年前から受け入れ、現在は20名程が3年間の研修を終えて帰国している。中国大使館や遼寧省からも再開への問い合わせがあり、安定したらまた受け入れていきたい。

新工場の用地も取得出来たので、建築し仕事を再開させたい。最盛時の1~2割程度での再出発となる。60人程の従業員もなんとか戻りたいと思っている。

国内のテレビ、新聞等、また中国から弟へ

の取材の申し込みがあったが、当人が亡くなっていることもあり断ってきた。

その中で、弟が表彰されることについて、色々考えてもみたが、弟家族がここで一区切りをつけるためにもとの思いから受賞させていただいた。

佐藤 充様の令兄・仁様談



河北新報 平成24年2月5日



読売新聞 平成24年2月5日



被災した工場

**故 二瓶 幸夫**

(享年72歳/宮城県仙台市宮城野区)

**故 遠藤 兼光**

(享年62歳/宮城県仙台市宮城野区)

**故 平山 一夫**

(享年52歳/宮城県仙台市宮城野区)

**故 鈴木 勝**

(享年65歳/宮城県仙台市宮城野区)

仙台市の宮城野区で町内会の役員を務めていた二瓶さん、遠藤さん、鈴木さんは、家族を避難させたあと町内に戻り、町民を避難誘導中に、また消防団員の平山さんは消防車で避難誘導中に津波に流され犠牲となりました。

● 推薦者 港町内会/仙台市宮城野区 ●

平成23年3月11日、仙台市宮城野区港町内会長であった二瓶さんは、午後2時50分大震災の後に津波が来るから早く非難するよう大きい声で呼びかけ走り回っていました。その後、家族を学校に避難させてまた町内に戻り、住民の避難誘導を続けている時に津波に流され犠牲になり、後日遺体で発見されました。

自らの命を顧みず住民を助きました。二瓶さんの必死の呼び掛けに応じて、避難して助かった人から感謝されました。

**推薦者：港町内会からの推薦書および二瓶幸夫令夫人貞子様談**



平成23年3月11日、仙台市宮城野区の港町内会役員の遠藤兼光さんは、大震災の後に津波が来るから早く非難するよう、町内を大きい声で呼びかけながら走り回り、一旦家族を小学校に避難させました。そこで校庭に避難してきた人を校舎に誘導し、避難を見届け町内に戻り、さらに避難誘導を続けている時に津波に流され犠牲になり、後日遺体となって発見されました。

遠藤さんは消防団員の経験もあることから、自分のことより他人のことを優先する人でした。

必死の呼び掛けに応じて避難して助かった人から「お宅のお父さんに助けてもらった。」と何人かの人にお礼を言われ、少し救いになりました。

**推薦者：港町内会の推薦書および遠藤兼光令夫人怜子様談**

仙台市宮城野区の港町内副会長の鈴木さんは、3月11日午後2時46分の大地震の後に、津波が来るから早く避難するよう町内を大きい声で呼びかけ走り回り、その後家族を車で小学校に避難させました。校庭に入ってきた人々を屋上に誘導し、その避難を見届けてから、すでに黒い津波が向うに見え、逃げろと言われているのに、町内を見回りに戻り津波に流され犠牲になり、後日遺体で発見されました。

自らの命を顧みず住民の人々を助け、皆さんから感謝されました。

**推薦者：港町内会の推薦書および鈴木勝令夫人きよ様談**

仙台市宮城野区港町で消防団員をしていた平山一夫さんは、平成23年3月11日の大地震の後に、津波が来るから早く避難するよう、消防車で町内を呼びかけて走り回っていました。

津波は来ないだろうと思っていた人たちも、平山さんの必死の呼び掛けに応じ避難し、助かった人が大勢いたと思われます。自らの命を顧みず町内の人々を助きました。

避難誘導を続けるとともに動けなくなった人を救助中、津波に流され犠牲となりました。

**推薦者：港町内会推薦書より**



宮城野区の惨状



**故 菅野 智之** (享年21歳 / 岩手県陸前高田市)

陸前高田市で、祖母を避難させたあと、消防団と共に、避難する車で渋滞する道路で交通整理を行なう中で津波の犠牲となりました。

● 推薦者 近江 恵子 ●

3月11日、ちょっとした行動が人の生死を分ける事となりました。

私の職場に、菅野君という21歳になる男の子がいました。菅野君は今時の子にしては珍しく正義感のある子で、この日両親の経営するコンビニで一緒に働いていましたが、具合が悪く、午前中で早退して、自宅で休んでいたはずでした。

そして大津波警報が出た時には、高台に逃げていたと思っていました。ところが、実際は一緒にいたおばあちゃんを安全な所へ避難させた後、危険を顧みず自ら地域の消防団に混じって車の誘導をしていたそうです。陸前高田の町中がパニックになって道路が渋滞していたのです。

車で逃げて渋滞に巻き込まれ、命を落とした人がたくさんいたと後に聞きました。5ヶ月後コンビニが再開してから「ファミマの人が、車の誘導をしてくれたので逃げる事ができました。もし渋滞したままだったらみんな流されていましたよ。本当にありがとうございました」とあるお客様にいわれました。私は「あっ、菅野君の事だ。」と思い背筋がゾクッとしました。

21歳の菅野君の咄嗟の自らを犠牲にした行動がたくさんの人の命を救ったのです。

彼は優しい目をした笑顔の素敵な子でした。

近江 恵子様 の推薦書より



被害の大きかった陸前高田市・多くが津波で流されたが復興に向けて整備が進む



**故 石川 拓真**

(享年26歳/宮城県仙台市青葉区)



**故 江刺家 光彦**

(享年44歳/宮城県仙台市青葉区)

警備会社に勤務する石川さんと江刺家さんは、石巻市での仕事中に地震に会い、避難してきた高齢者を2階に抱え上げたり、付近住民など70名近くの避難誘導を行っているところを津波に流されました。江刺家さんは16日後にご遺体で発見されましたが、石川さんは行方不明のままです。ご両親は、息子さんを探すため、重機を自ら操作し捜索活動をされています。

● 推薦者 石巻市北上総合支所地域振興課 ●

セコム株式会社の社員、石川拓真さんと江刺家光彦さんは、平成23年3月11日午後2時46分の東日本大震災発生時に、北上総合支所内にあるATMにお金の補充のため来庁していた。

ふたりは大津波警報が発令されている状況の中、本来なら自分たちの車（社用車）で避難できたのであるが、北上総合

支所に避難してきたデイサービスセンター利用の車イスの方や杖歩行の方などの高齢者の方を2階に抱えて上げたり、近所の住民の方の避難誘導を行うなどの献身的な活動を行いました。

推薦者：石巻市北上総合支所地域振興課の推薦書より



石巻市の惨状



被災した北上総合支所





**崎山 文衛** (55歳/岩手県大船渡市)

大船渡市で漁師が津波に流され、屋根につかまっている所を、高台に避難させ救助されました。

● 推薦者 大船渡市漁業協同組合 ●

平成23年3月11日、15時過ぎ地震後の津波で大船渡市赤崎町のあたりは、家の軒下まで津波の第一波が来た。救助した知人の男性(78歳)は、所有する漁船のもやい網を延長しようと蛸ノ浦漁港へ下がったところを津波により100メートル程陸側へ流され、民家の軒下に吊るしてあった漁業用のロープに必死な様子でつかまっているのが、我々が避難していた高台の避難所から見えた。

避難所は、男性がいる所から20メートル程の高台にあった。そこに避難していた多くの人その様子を見ていたが、第一波の津波の後に第二波がすぐ来るといふ思いと、男性と避難所の間には、瓦礫、網、ロープ等が流されて溜まり、誰も救助に向かうことが出来なかった。

第一波の津波が引いていくのを見て、自然に自分一人で男性の所に降りて救助し、高台の知人宅に避難させた。わずか20メートルの距離だが、やっとの思いで辿り着いた。救助した後で、消防団から「あんたも命を落とすよ」と言われ恐ろしくなった。

第二波は、夜の10時頃に第一波よりも大きい津波が押し寄せた。

なお、人命救助については、もう一件、近くの民家から高齢者(84歳)を救助した。この人は恐怖から腰が抜けたような状態になり、動けない状態だったので、担いで避難所まで行った。

受賞に関しては、私以外に本来受賞すべき人がもっといると思いますが、謙虚に受け止めさせて頂きたいと思ひます。



**有限会社マリンメカニック** (宮城県宮城郡七ヶ浜町)

七ヶ浜町で船舶用品を販売する社は、津波で浸水する中、唯一動いた水上バイクで街中を駆け巡り、助けを求め人々を次々と救出。また消防や自衛隊の救助用ボートを牽引し、100名近い方を救助しました。

● 推薦者 特定非営利活動法人 パーソナルウォータークラフト安全協会 ●

代表取締役 今崎 真幸

平成23年3月11日、私が経営する船舶販売会社の従業員達の無事を確認し解散した直後、従業員の鈴木君から多賀城市桜木町付近の被害状況がひどく何とか来て欲しいとの連絡が入りました。私は急いでマリナーへ戻り津波の合間をみて使用出来る水上バイクとトレーラーをガレキの中をかき分けて探しだし多賀城に向かいました。

現場に到着した時には声を失いました。真っ暗闇の中に聞こえてくるのは助けを求め呼ぶ声と非常を伝えるサイレンのみが響き、普段は賑わっている桜木飲食店街の建物の1階がすっかり水に浸かり、道路には車やガレキ等が浮かんでいる状態でした。暗闇の中、目を凝らしてみる

と電柱、沈んだ車の屋根、孤立した歩道橋にはたくさんの人達が見えました。

救助活動している消防職員の方々に協力し、指示に従い無我夢中で助けを求め人達を次々と安全な場所まで送り届けました。何往復したかは覚えていませんが、気が付くとあまりの寒さのため手足の感覚も無くなり、従業員の鈴木君と水上バイクの運転を交代しながら体力の限界まで救助を続けました。

当時は自分達に出来る精一杯の行動が今回の受賞につながり正直驚いています。そして水上バイクが安全で迅速に救助できる乗り物として認知して頂ければ幸いです。

有限会社マリンメカニック  
代表取締役 今崎 真幸



河北新報 平成23年4月2日





**細川 繁一** (51歳/岩手県大船渡市)

大船渡市の自宅近くで、逃げ遅れ津波に流されてもがきながら助けを求める女性を発見。着衣のまま水に飛び込み女性を救助されました。

●推薦者 高橋 節子●

この度は受賞させて頂きましたこと慎んでお礼申し上げます。

私の家は代々漁家で、海の仕事に携わって私も育ちました。今は、わかめ養殖を主流に、ホタテや昆布養殖業に日々営んでいます。自宅は三陸海岸を目の前にして高台に、わかめ加工作業場と一緒に建っております。

私はあの日、東日本大震災の3月11日2時46分、アルバイトのおばさん達と一緒にわかめの芯抜き作業中でした。その中には今回推薦してくれた高橋節子さんもいました。高台にある自宅近くの作業場でワカ

メ作業をしていた時です。物すごい地震で作業場のあらゆる物が壊れ落ち、あまりの恐ろしさに外に飛び出し、長い揺れが治まるのを待ちました。

アルバイトのおばさん達や節子さんも約50メートル程下にある自宅を見回りに帰って行きました。私は直ぐに自家用車のラジオのスイッチを入れ津波情報をずっと聞いていましたが、海を見るとどんどん海の水が引き始め、今まで一度も見た事の無い遠くの海底までしっかりと見ることが出来たのです。51年も生きてきた中で初めての事なので、ただただ驚きました。



自宅の前で

それから間もなくして、大津波が押し寄せて来ました。その様子をカメラに収めようと庭先の高台から撮っていました。押し寄せる大津波は節子さんの家も飲み込んでいました。その時です、「助けて、助けて!」と甲高い悲痛な叫び声が聞こえ、見ると節子さんが大津波に流され助けを求めているのです。

ただただ助けなければと、大津波の事も危険な事も考えずに夢中で節子さんを助けたい一心で、約3メートル近い石垣の上から海中に飛び降り助けに行きました。私は助けようと何度も手を差し伸べましたがなかなか引き上げられず、身体の向きを何度も変えてよう



やく引き上げる事が出来ました。服を着ているうえに海水を含んでいるので、非常に重かったのと、波がどんどん移動しているので大変でした。その後も次から次と大津波が押し寄せ、私にも大津波が襲い掛かってきましたが、必死にフェンスに掛り大津波に流されずに難を逃れました。

節子さんを助けた事はもちろんですが、人助けが出来たと云う喜びの方が大きかったです。

これからも助けを求める人がもしいるならば、私は迷わず行動します。



大船渡市門ノ浜



飛び降りた場所



**津田 廣明** (72歳/宮城県石巻市)

石巻市内の幼稚園園長の津田さんは、津波が押し寄せる中で残っていた園児11名を職員とともに梯子をかけて園児を登らせ、間一髪、全員を避難させました。

●推薦者 社団法人 宮城県私立幼稚園連合会 理事長 村山 十五  
宮城県知事 村井 嘉浩●

この度、思いもかけず東日本大震災における救難活動の貢献者として表彰の栄に与ることになり、大変な驚きと恐縮で一杯でございます。受賞は私個人と言うよりも職員一同が賜ったものと考え、有り難く頂戴させて頂きます。

3月11日に石巻みづほ第二幼稚園にて、私他職員10名と預り保育の園児13名が大地震に遭遇いたしました。地震後津波を予想し避難の判断を迫られる中、渋滞が始まり、車での避難は難しく、また徒歩で避難出来る安全な場所も周囲にないという状況では、この場が一番安全ではないかと判断し、園に留まる決断を致しました。地震直後、保

護者に迎えられ2名の児童が帰宅し、迎えて来て帰宅不能となった父親をあわせ23名が行動を共にする事となりました。

程なく防災無線から「鮎川」「津波」「9メートル」という音声が聞こえてきました。半信半疑ではありましたが、9メートルの高さであれば二階の屋根に登れば安全だと考え、念のため脚立を準備させておきました。その後間もなく大津波が襲来しました。急いで一階の屋根から二階の屋根へと登りました。幸い全員無事に登る事はできましたが、屋根の上は雪と風で、寒さは身体の芯まで冷える状況でした。

翌日11時頃、三重の海上保安庁の方々に



園の2階の屋根へ避難

救助され、続いて自衛艦「たかなみ」に収容されました。関係の方々には、救助までの献身的な働きとご親切を頂き只々感謝するばかりです。二日後に親元に子供達を帰すことが出来た事、そして職員が家族に元気で会えた事は喜びに堪えませんでした。

震災発生時、ほとんどの園児が帰宅していた事、保育中に地震、津波がこなかった事が不幸中の幸いでした。しかし後で知った事ですが、7名の園児が自宅で逃げる途中に亡くなっており、悲しくてやりきれない気持ちは今も絶えません。

当時の預かり保育の子の内、現在2名が在籍していますが、地震等には大変敏感になり

精神的に不安定でしたが、時間の経過と共に気持ちの立て直しも出来、一安心しています。

石巻みづほ第二幼稚園は全壊し、物品も全て汚損流失してしまい、現在は石巻みづほ幼稚園と合同で保育している状態です。市の復興計画が明確になった段階で正式に再建する予定です。今後種々難しい問題が予想されますが、皆様方のお智恵を拝借しながら頑張りたいと考えております。今後とも宜しくお願い申し上げ、受賞に対する御礼いたします。



めちゃくちゃになった園内



救助された時の様子





校長 菅野 次郎

## 陸前高田市立広田中学校 (岩手県陸前高田市)

地震発生当時3年生の生徒が、校舎の裏の高台に避難する際、近くの広田保育園の園児に遭遇。園児を両脇に抱えるなど急こう配の草むらを駆け上がり、39人の園児を無事避難させました。

● 推薦者 鶴浦 昌也 ●

### 「改めて広田中の生徒達を誇りに思う」

今まで経験したことのない激しく長い揺れ。ただならぬ気配を感じながら、生徒・職員は避難訓練どおり地域の避難所の本校体育館に避難した。その後、地域の方々も続々と避難して来たが、頻繁に続く余震で体育館の天井から物が落ちるなどかなり危険な状況であった。もっと高いところへ避難を考えていた矢先、体育館から見える防波堤を津波が一気に超えるのが確認された。

急いで校庭を挟んで、百メートルほど離れた高台にある県立高校跡地の校庭に、全員で必死に走って逃げた。道路のない急斜面を這いつくばってよじ登る際、本校職員は、生徒の誘導の他に高齢者の方々に背負ったり、手を引いて助けたりしながら必死で駆け上がった。

また、一緒に逃げた生徒たちの中には、隣接している保育園で保育士の周りに恐怖で怯えていた園児たちを呼んで両手で抱えたり、手を引いたりしながら、一緒に避難を手伝った生徒も数名いた。かなり混乱した中での避難ではあったが、びっくりするほど、冷静に行動してくれた。

このような連携プレーがあったお蔭で、職員・保育園児・避難者が、すぐそばに押し寄せる津波から辛うじて、逃げ切ることができたのだと思う。その後高台まで避難し、後ろを振り返ると、本校校舎、校庭には大津波が押し寄せ、避難者や職員の車が、津波の渦の中でぶつかり合っているのが確認できた。まさに間一髪の避難であった。



吉家秀明校長 (震災当時)

その後も津波が何度も押し寄せ、防波堤を破壊するすさまじい音が何度も聞こえた。避難後も余震が続く暗くなってきたので、より高台にある広田小学校に消防団の方々に誘導して頂きながら避難し、体育館で避難者の方々と一緒に眠れぬ夜を過ごした。この津波により広田半島の先端にある広田町は、道路も通信機能も破壊され、内陸との連絡が一切取れない、まさに「陸の孤島」となってしまったのである。

学校再開は中学校校舎が使えないという判定がなされたため、近くの小学校の校舎をお借りしてのスタートとなった。小学校が地域の避難所になり、空き教室は避難した方々が利用するため、中学校として使える教室は、特別教室だけであった。

体育館は物資倉庫、グラウンドは仮設住宅建設と部活動の場所もまったくない状況。そんな中、全国、世界中の多くの皆さんから温か



この山を園児とともに登った

い励ましと多くの支援物資・義援金を頂き、どうにか学校を再開することができた。二学期以降は仮設住宅ができ、教室も使えるようになり、体育館も支援物資を整理頂き使えるようになってきており、環境は徐々に改善されてきた。

今回の生徒たちの行動については、震災後、保育園の先生方からお話を伺って初めて知ったものであった。その後聞いてみると「自分たちとしては当たり前のことでした」です」と明るくはにかみ、笑顔で答えてくれた。「よくぞ勇氣ある行動をとってくれた」本校の生徒たちを改めて誇りに思う出来事であった。

陸前高田市立広田中学校  
校長 吉家 秀明 (当時)





## 後上 勝俊 (31歳/宮城県名取市)

名取市の宮城県農業高等学校で、校舎3階に200名の生徒らを避難させた後、生徒と教師2人が津波に流されるのを目撃。皆があきらめていた所、携帯電話で校舎近くに2人の生存が確認されると、腰まで水につかりながら無事2名を救助されました。

● 推薦者 昆野 慶太 ●

震災による津波で、目の前で流されていった二人（同僚と女子生徒）を何とかして助けられないか。そこにいた誰もが思っていたことだと思います。しかし校舎の隣の武道館の屋根に掴まり、そこから渡り廊下の屋根を伝って体育館の2階へ入っていく同僚の様子を皆で応援しながら見守ることしかできませんでした。そして、もう一人の安否は不明…。夕方になり水が少しずつひいていました。「どこか外につながる道はないか。」と思い、私は職員昇降口のほうへ行って見ました。なんとかそこから出られそうな感じがした私は、階段を塞いでいる漂流物を除けてみました。そこから外への導線ができました。時間は16時30分を過ぎ薄暗くなってきました。「助けに行くなら今しかない。」そう思い決心しました。

水はだいぶ退いたものの185センチある私の腰の位置までありました。氷水のような黒く濁った水の中たくさんの瓦礫を掻き分けながら体育館に向かいました。体育館のギャラリーにはビシャビシャにぬれた同僚がいました。本人は眼鏡が流されてしまい全く見えないということだったので、抱きかかえて戻ってきました。とにかく、無我夢中で戻ってきました。待っていた昆野さん（推薦者）に引渡し、水から上がろうとしたとき、「もう一人は、もう駄目かと思ってたけど、武道館裏の百周年記念会館のベランダに掴まり、何とかその建物の中に入ったと、本人の電話にて安否を確認できた。」という情報が飛び込んできました。「行くしかない。」私は、記念会館に向いました。

体育館に行くより3倍くらいの距離と比べ



避難した屋上から見下ろすと

物にならないくらい大量の漂流物が行く手をさえぎるなか、「とにかく行かなければ」という気持ちが、私の足を前へ出してくれました。何とか生徒のところにとどり着きました。そこには靴も眼鏡が流され、周囲の様子が分からず、身動きも取れない。一人で必死に不安と恐怖に耐えている生徒がいました。生徒を背負い、来た道を必死に無我夢中で戻りました。周囲の反応は、二人の生還への喜びでした。なぜ、二人が合流できたのかは分かっていないようでしたが、そんなことはどうでもよくなりました。待っていた母と娘の再会はとても感動的でした。そのとき「救助に行って来て本当によかった。」と思いました。

私は、今でも津波の写真や動画を見ると、当時を思い出してしまい調子が悪くなります。体育館がない状態のときから一緒にがんばっ



職員室の惨状

てきたバレーボール部員たちと、夢を追いかけて活動しています。クラスの連中とはバス授業など大変な思いもさせましたが、楽しい思い出も作ってます。

この先、復興するのにどれくらいの時間がかかるか分かりませんが、クラスや部活、そして宮農の生徒たちと一緒に、不自由けれども楽しく学べ、充実した学校生活を送れる宮農を作って生きたいと思っています。

今回の受賞は、すごくびっくりしました。まさか、同僚が表彰の候補者に応募してくれていたなんて思いもしませんでした。当日は何がなんだか、とにかく助けなきゃいけない。という気持ちで無我夢中でした。このたび、このような賞に選んでいただきまことに感謝しています。



津波にのまれた校舎



水が引いた後の惨状



分団長 小國 峰男

## 大槌町消防団第二分団 (岩手県上閉伊郡大槌町)

大槌町は地震による津波に加え、火災が発生。41人の団員は、町内にある水門を閉めた後、高齢者などの避難誘導や消防屯所の半鐘を鳴らし続ける中、11名の団員が津波の犠牲となりました。

● 推薦者 大槌消防署 ●

### 「東日本大震災大津波を経験して」

平成23年3月11日14時46分、かつてない大きな地震を経験した我々第二分団員は、津波襲来を直感し地震が収まらないうちに、自宅や職場からそれぞれ水門扉門の閉鎖に急行しました。15時04分管轄地区内の水門扉門の閉鎖を完了し、その後、難誘導等次の任務に散って行きました。

停電で屯所のサイレンが吹鳴出来なくなり半鐘を乱打していた団員、防潮堤上から海側の逃げ遅れ者の確認誘導をしていた団員、屯所に参集途上だった団員、屯所付近で避難誘導をしていた団員、寝たきり者の救助活動をしていた団員が、15時20分過ぎに防潮堤を越流した大津波に呑みこまれ、11名の仲間が帰らぬ人となってしまいました。

た。

11名の仲間達には、逃げてもらいたかった、生きて又一緒に活動したかったと強く思います。我々消防団員は災害現場で逃げない人や逃げられない人が居れば、自らも逃げられないのです。そんなジレンマと闘いながら全国の消防団員は災害から国民を守っているのです。

今後は国民全体で、津波を始め自然災害に対する防災意識を更に高め、国民一人一人が自ら避難するという体制を作り上げて行かなければならないと思います。特に津波に対する心構えは、地震=津波=避難との考えで行動して行かなければならないのです。



震災前の大槌町消防団第二分団



震災前の火のみやぐらの姿

そうする為には、防災教育がとても重要だと考えます。全国の小学校で津波を始め、各種防災教育を実施すれば、子供達は自然災害から素直に逃げ延びてくれるはず。そうすれば、大人になってからも自然災害から生き延びられる知識が身に付くものと思っております。

子供の防災教育も重要ですが、大人に対する防災教育がもっと重要だと考えます。東日本大震災大津波で大人の犠牲者が多く見られるのは、津波はここまでは襲来しないだろう、昔の津波はここまでは襲来しなかった等々、思い込みや言い伝えを信じて犠牲になった人が多いのです。この様な大人の犠牲を無くす為にも、大人に対する防災教育は喫緊の課題です。大人はあらゆる自然災害に対し想定外を想定し自ら生き延びる術を身につけなければならぬと強く思います。



半鐘を鳴らし続けた火のみやぐら

今回、東日本大震災における貢献者表彰を受賞するにあたり、我々大槌町消防団第二分団員は消防団員として当たり前の任務を遂行したまでであり、恐縮致しております。しかし、殉職した11名の尊い活動を末永く後世に伝え、津波の恐ろしさや早期避難の徹底を国民に訴えて行きたいと思っております。殉職した仲間達は生きたかったと思っております。

我々生き延びた分団員は、復興までは、まだまだ長い道のりですが、殉職した仲間達の崇高な意思を引き継ぎ、今後も大槌町の防人として邁進して行く所存です。

そして、東日本大震災大津波では、住民を守る為自ら命を賭けた消防団員が多数いた事を国民の皆様には忘れないでいただきたいと思っております。

大槌消防団第二分団  
分団長 小國 峰男



大槌町安渡一丁目大槌川河口付近 迫る津波を消防車から撮影した





副分団長 三浦 裕一

## 名取市消防関上分団 (宮城県仙台市太白区)

113人の団員のうち50人が出動。住民の避難誘導、寝たきりの障害者の救助や水門閉鎖中に消防車が流されるなどして、13名の団員が犠牲となりました。

● 推薦者 乳井 昭道 ●

関上は宮城県名取市の太平洋岸に位置しています。

被災地地区の住民は6,200人、名取市の犠牲となった死者・行方不明者は約970人であり、この地区の人がほとんどです。私はその地区で消防署副分団長をしています。

地震当日、分団員はそれぞれの仕事に就いており、113人中当地に残っていたのは50人程度と推測されます。地震発生後に直ちに日頃の打ち合わせ通り、地区を区分した9グループが動き始めました。私は自宅にいましたが、大津波警報が出ると、家に残っていた母の避難を親戚に依頼し、統括する立場で9部が担当する水門閉鎖の状況を確認

に行きました。9部の団員に指示後、住民避難の呼びかけの行動に移し、各分団員も役割に合わせ同様な行動をしています。

自分の受け持ち地域である小塚原の住民に避難を呼び掛ける途中、海に近い集合住宅に寝たきりの高齢者が2名おり、その近所の人から救助を依頼され、他の団員と一緒に救助に向かいました。寝たきりの住民を布団ごと自分の車に乗せ運び、避難所である関上小学校に向かいました。15時40分過ぎ、大津波が車の背後に迫るなか、車の渋滞に巻き込まれながらも、小学校の非常階段を駆け上った時には、津波が腰まで押し寄せてきていました。



三浦さん宅は火災の被害にも遭われた

私は他人の手を借り、非常階段を駆け上り一命を取り留めましたが、多くの団員が犠牲になりました。その数13人、地区に滞在していた者50人中で比較すると、4人に一人が犠牲となっています。それは、消防車等で住民に避難を呼びかけることに専念したからです。住民の避難を待って自分が避難するという、自己本能みたいな行動が、多くの犠牲者を生む結果になりました。消防車8台中5台が流失していますが、ほとんどが地区を巡回中に被災したものです。

私が救助した人から言われました。「あなたが居なかったら私の命はなかった」

と。しかし、消防団だったら誰でもそのような行動をする、当たり前のことです。

震災後は、ほとんどの団員が罹災しましたので、当地区に残っていません。地区消防団の活動は、他の地区の消防団に依存していますが、先日発生した瓦礫置き場の火災では、消防団員に通報があり、遠くから駆け付け消化活動に参加しました。バラバラになっても消防団魂は皆一つです。地区での活動が再開出来る日を心待ちにしております。長い道のりになりますが、この表彰に思いを奮い立たせ、地区の復興に向けて取り組みたいと思っています。

名取市消防関上分団 三浦 裕一



名取市消防関上分団の活動の様子





団長 山下 修治

## 宮古市消防団 (岩手県宮古市)

16名の団員が犠牲となるなか、行方不明者の捜索、消火活動、瓦礫の撤去等、延べ13,332名が82日にも及ぶ活動を続け、現在も仮設住宅の警戒活動等を続けられています。

● 推薦者 宮古市消防対策課 ●

### 「東日本大震災の教訓」

先般、東日本大震災における貢献者表彰を賜り、大変感謝申し上げます。

式典会場では700余名の出席者の中での受賞で、感涙にむせぶ思いでありました。改めて日下会長様をはじめ、関係者の方々に御礼と感謝を申し上げます。

私たち消防団は、今後も市民の生命・身体・財産の保護のため、今回の大震災を教訓として、ますます、団員一同、切磋琢磨して二度と消防団員が犠牲にならないため、訓練及び教育をしてまいりたいとの思いであります。

最初に、救護活動においては、被災した方々を救助することが、ある程度できたこと、瓦礫の中からも救助することができたのは、震災発生時間が日中であり、周りの状況が見えていたためと思われま。これが夜間の発生であったと考えると背筋の凍る

思いであります。

消防団員の中には、水門を閉鎖し終えると同時に津波が襲来し、高台に避難することも出来ずに防潮堤の一番高い場所に駆け上がり、雪が降る中、午後九時頃まで降りることが出来なかったとの報告も受けております。

二日目から、各分団員は、早朝にもかかわらず、救助・救出に活動・作業をこなし、幸いにも旧宮古市では、震災直後の火災が無く、捜索活動に専念することが出来ました。

しかし、田老地区では、建物火災から延焼して山林火災が発生し、加えて消火活動が思うように出来ず、また、消防ポンプ自動車も流出破損して消火作業自体にも手間がかかる状況でありました。そこで、被害を受けていなかった第七・第八方面隊の四個



市庁舎から撮影された津波

分団を指揮し、岩泉町方面を迂回させて消火活動にあたらせました。

今回の災害では、被災していない分団では、屯所を市民の方々の避難所として開放し食料確保に奔走し、食事を提供したとの報告も受けました。その結果、市民の方々からは、消防団員及び自衛隊の方々には大変お世話になったとの言葉をいただき、市民の一声が分団の活力になったと感じております。

今現在は、宮古市の計らいで、消防自動車を流出破損した分団にも六台配置でき、本来の消防活動が出来るようになりましたが、屯所などは、仮屯所・仮車庫の状況であり、今後の街づくりの中で考えて行かなくてはならないと思っております。

宮古市は、平成の大合併で、田老町・新里村・川井村が合併して広大な面積(1259.89km<sup>2</sup>)となり、消防団の活動も広大過ぎて、幹部会議に出席の際は、車で一時間以上かかる幹部は自家用車を使用せざるを得ないので、各方面隊に連絡者を配置したい気持ちではあ



りますが、現状は厳しい状況であります。

現在は、消防団員が震災後減少している状況であり、新入団員の入団促進を考えております。

団員の待遇改善、手当等の見直しについて、総務省、消防庁も動き出しており、自治体においても出動手当等の見直し・増額を検討との報道もあるので、消防団としても期待をしているところです。

五月一日には、帝国ホテルでの受賞式に出席させて頂きましたが、私たち消防団の活動を認めて頂き、四十五個分団・1283名を代表し、関係各位の皆様にご挨拶申し上げます。

私たちも、市民のため、今後ますます精進し、市民に期待される消防団として頑張る所存でありますので、ご指導、ご鞭撻をどうぞよろしくお願い致します。

宮古市消防団  
団長 山下 修治



宮古市庁舎から撮影された市内



震災翌日の宮古市内





吉田 浩文 (44歳/宮城県名取市)

避難先の名取市の閑上小学校で、消防ホースを体に結び、津波に流されそうな女性3名と木にしがみついた男性を救助。その後は自ら市に申し出てボランティアでダイバー隊を結成、付近の河川で遺体や遺留品の搜索をされています。

● 推薦者 名取ハマボウフウの会/特定非営利活動法人 サンクチュアリーエヌピーオー 馬塚 文司 ●

昨年三月十一日、名取市閑上地区で地震と津波の被害に遭いました。避難した小学校の窓から、桜の樹につかまって助けを求めている年配の男性が見えました。他にも校舎の壁にしがみついている女性も数人いました。私は普段、潜水士として海に馴染み、安全のプロとして海水浴場の警備責任者を任されてもいましたので、津波の流れを読み、機会を見計らって飛び込みました。すぐ後ろで妻と七歳の息子が「やめて、お父さん行かないで!」と叫んでいましたが、私には行かねばならない気がしたのです。

校舎内にあった消火ホースを手渡し、桜の樹の男性を含め合計四名の方を救助しましたが、一名は真夜中に亡くなりました。この度各方面から推薦を受け、このようなかたちで表彰されることは嬉しいことではありません。けれども、本当のことを申し上げれば、校舎に戻ったあと「たった四人しか助けられなかった…」という後悔に似た気持ちが生じました。ドライスーツを着ていれば、一晩中救助を続けて何十人でも助けられたのではないかと。安全のプロだと思ってやってきたが、自分もまだまだなのだな、と。

その後、避難所から(私自身も家屋を流されましたので)行方不明者搜索のために数ヶ月間、瓦礫の風景の中へと通い続け、数百体の遺体を引き上げましたが、日ごとにそうした思いは強くなっていきました。閑上地区は九百名以上の犠牲者を出し、今も

なお行方不明の方々が五十名以上います。豊かな自然に恵まれていた街は更地になり、人影もなく、変わり果てた荒涼とした景色だけが残されています。復興へは長い道のりとなるでしょう。

しかしながら身近に嬉しいこともいくつかあります。人命救助の話聞いた地元若者たちが、潜水士になりたい、と私のところに集まってきたことです。二十歳にもならない若者もいますが、夢や目標を見つけて頑張ろうという彼らに、できる限り手助けをしたいと考えています。

いまは彼らと一緒に「名取希望塾」を運営しています。今後の街づくりを一緒に考えたり、ともに学び合ったり、多感な時期ならではの悩みを語り合ってみたり。新しく復興した街を未来に引きついでいくのは、彼ら若者たちです。そのときまで我々大人が頑張らないといけません。ともに支え合って、この困難な時期を乗り越えていければと願っています。







## 大平 翔太 (20歳/宮城県仙台市太白区)

名取市の自宅2階で津波に呑(の)まれたまま漂流しましたが、火の手が迫り周りの人に避難を呼び掛け、水に飛び込み5人を伴って避難所に辿りつきました。避難所では9名を救出し、被災者のケアや、支援活動に尽くされました。

● 推薦者 社会福祉法人 みずほ ●

このたびは、このような立派な賞をいただけることになり、大変うれしく思います。

当時、近所の避難誘導の最中に津波が来てしまい、自宅2階に避難したものの家ごと流されてしまい、500mほど先に漂着しました。

今回、受賞することになった漂着先での生存者救助活動、及び火災からの避難誘導、また避難先の老人ホームでの生存者救出活動ですが、皆さんが考え賞賛されるようなほど、すごいことはしていないと自分では考えています。あのときは、自分にできるあたり前の行動を無我夢中でとったに過ぎません。

当時、結果的に14名の方を助けたものの、自分の目視できる位置で助けを求められたものや足場などの問題もあり助けることが出来ず、見つけたときには、既に亡くなられていた方たちなど18名の方を助けることができませんでした。

その中でも、津波に流されたものの奇跡

的に生き残り、その後の火災からの避難最中に、高所からガラスの上に転落負傷。これによる出血が原因で亡くなられた女性については、今となっても忘れることが出来ません。

あのとき自分がもっと注意しまわりに気を配っていれば、転落し負傷することはなかったのではないかと? 負傷後にとった応急処置にも、もっと適切な手当など対処法があったのではないかと? と今になって考えることが多々あります。

気づけば被災し一年が過ぎていました。あのときの自分を振り返り感じるのには、誇らしさでもなんでもなく「自分の無力さ」これに尽きます。

その為、今回の受賞の決定の通知を頂いたとき、はじめは大変うれしく感じましたが、改めて結果的に今回受賞することに決めさせていただいたのには、理由があります。

自分は小学生のときから、陸上自衛官に



避難先の老人ホーム 9名を救出

なりたいたいという夢がありました。その当時は人命救助に興味があったわけではなく、単純にカッコいいからという簡単な理由でした。一時は家庭の事情などもありあきらめていたものの、今回の震災をはからずとも最前線にて目の当たりにし、人命救助等に関係してみ、あらためて陸上自衛官になりたいと考えるようになりました。

あのときの自分は無力で、数メートル先の人一人を助けることができませんでした。自分が陸上自衛官になることで、万に一つまた同じ状況が起こったとき、間接的にでももっと多くの人たちを助けることができるのではないかと、悲しい思いをする人を減らせるのではないかと、こんな自分でも役に立てるのではないかとという考えにいたりました。

それなら、ほかにも消防や救急、警察などの選択肢があると考えられるかもしれませんが、今回、色々な場面を見てきて、陸上自衛官がもっとも自分の求めるところに近く、自分にあっていると思ったためです。自衛官に



流された後、救助作業を行なった屋根 5名を救助

なって、人を助けられるだけの能力や技術を身に付けることは、簡単なことではないと思います。

しかし、今の自分であれば、これを成し遂げることが出来ると自負しています。

無論、同じような災害が起こらないことに、越したことはないですが、自然災害である以上、これからも起こらないとは言い切れません。

これを成し遂げるためにもまずは、陸上自衛隊に入ることが必要であり、入るためには試験に受かる必要があります。恥ずかしながら、今の自分の実力ですぐに試験を受けるのは難しいと思っています。そのため、これから一年の勉強期間をおいて、その後受験しようと考えています。

この期間は、バイトなどをしながら生活をつなごうと考えており、その不足部分に副賞を充てさせていただこうと思っています。

夢を実現し、自分の思いを通すために、今回受賞をさせていただいた次第です。



自宅があった場所 火災から逃れるため5名とともに渡った川





## 岩崎 順一

(33歳 / 神奈川県横浜市港北区)

## 安住 紀人

(29歳 / 岩手県気仙郡住田町)



## 北田 駿

(23歳 / 岩手県紫波郡紫波町)



## 横山 優士

(27歳 / 秋田県能代市二ツ井町)



## 遠藤 新悟

(30歳 / 岩手県陸前高田市)

5人は、他県から柔道整復師の研修にきていた陸前高田市で被災しましたが、1km近い道をそれぞれが高齢者をおぶって避難し、避難所ではずぶぬれになった人に薪を炊いて暖をとらせるなど、若い力を発揮し救難に尽くされました。

● 推薦者 岩崎 健二 ●

### 「手助け出来た喜び」

3月11日、午後の診断が始まり間もない時であった。そこには15～6人の患者さんがいつものように皆で話が弾んでいる時だった。

突然、今まで経験した事のない、それがいつまでも止まらない、大きな地震だった。

大船渡から来ている漁師の鈴木さんが、真剣な顔で「大きな津波が来るぞ!」と言って、急いで外へ出て行った。

それを聞いた院長の父は患者さんに「もう今日は帰って下さい」と大きな声で叫んだ。

自分と一緒に働く北田君と二人は自宅を見て来いと言われ急いで行ってみると、タンスはひっくり

返っているは、食器棚もめちゃくちゃだった。

しばらくすると、友人が大声で「順一、津波がきたぞ!早く逃げろ!」と血相を変えて走ってきたので、自分も逃げた。

避難先は子供のころから遊びまわった自宅から、少し離れた裏山の本丸公園であった。

200人近い人が集まっていたが、多くの人々は口数も少なく恐怖に震え、啞然とした様子が目についた。

全身ずぶぬれになって下の方から登ってくる人もいた。暖をとらせるために火を焚こうと我々5人は指示を受け、枯葉や木を集め火を付けたがなかなか燃え上がらない。燃え上がるのに随分時間が

かかった。皆が暖をとるために三か所に火をつけたが、当日の寒さはいちだんと厳しく、大津波から時間が経つにつれ辺りは暗くなり、雪がちらつき始めてきた。

その時、父は山へ集まっていた人たちに「もうこれ以上ここに居てもしょうがない、避難所へ行こう」と声をかけ皆を立ちあがらせ細い山道を歩き始めた。横山君はお年寄りを休みながらとはいえ最後まで背負ってくれ、また我々は荷物を持つなど助け合って歩いた事は今でも忘れられない。避難所へ送り届けた後、すぐに焚火をした所へ戻り太い木についた火を消す作業が始まった。

水もなく、土を掘って燃え上がる火にかける作業は決して楽ではなく、大変な時間がかかり、すべて消し止めるころには辺りは随分暗くなっていた。下の民家から運ばれた布団をお年寄りの待つ避難所へ運んだが、今の布団とは違い、随分と重かったと父は話していた。

それから数日後、ボランティアで本業の治療を行うために、避難所に行った時だった。患者さんに「あの時は助けて頂いてありがとう」と多くの人から声をかけられたときに思った事は、何も特別な事をしたわけではないのにと少し照れくさい気もした。

今回、社会貢献支援財団へ表彰の推薦をしたとは聞いてはいたが、まさか我々がこのような表彰を受けるとは思ってもみない事であった。表彰を頂けるにあたり改めて思う事は、今後は多少なりとも自分たちが世の中の為にできる事があるとすれば、率先してやる事の大切さを誘導作業を通じて知る事も出来たということである。

そして自分は、このような表彰式に出席できる事に驚いています。

最後に一言お礼を申し述べさせていただきます。

本当にありがとうございました。

岩崎 順一

### 「東日本大震災での経験」

この度は素晴らしい賞をいただき、誠にありがとうございます。

私個人として、受賞という実感は殆どといって良いほどありません。救難活動といっても、その時その場で出来るごく当たり前のことを漠然とこなしただけに過ぎません。その行動を評価し、表彰して頂くこととなり正直、恐縮しています。

震災当日は、間一髪で住まいの裏山にある高台に避難したのですが、避難をしてきた方々の殆どが、着の身着のままでおられました。

雪も降り始め暗くなるにつれ、冷え込みも増し、集まった方々の暖を取るために、枯れ枝等を集めたりしたのが、救難活動の始まりでした。

その後は、ご年配や体の不自由な方、津波でずぶ濡れになった方に手を貸したり、下から上がってきた布団や毛布等を運んだり。現状把握の為に情報収集に走り、別の避難所までの経路を確認した後に誘導、焚火の後始末、全員が避難したことを確認する等、山道を何度も駆け回っていました。

避難した山に誰もいなくなった後は、既に日が陰ってきておりましたが、残された布団を二カ所の避難所まで車をお借りして、運び込んだりもしました。

避難された方々の中には、自分達と年齢がそう変わらないであろうという方も結構おられましたが、声を掛けても手伝ってくれた方が殆どいなかったことは、残念でしかたありませんでした。

現在は、院長先生に再びお声をかけていただきまして、陸前高田市の隣町である住田町に残っておりました分院にて、仕事を続けております。

整骨院の再開当初は、院長先生と共にボランティア活動で避難所をいくつも回って、何人も治療を行ったりもしました。その際に、色々な方々に感謝の言葉をいただいたことは、一生忘れないと思います。

また整骨院に来院して下さった昔の患者様や避難をともしした患者様にも、「あの時はありがとう」等とお声をかけていただくことも、度々ありました。今の自分にとって、それは大きな励みとなっております。

今後は、院長先生の下で学んだことは勿論ですが、震災で経験したことや学んだことも後世に伝えつつ、全ての経験を基盤にして、将来は自力で開業できればと思っております。

その折には、全国各地からご支援頂いたことや、今回の表彰に報いるためにも、何かしらの形で少しずつでも、社会に恩返しが出来ていければと思っております。

安住 紀人

未曾有の東日本大震災から早一年。当時の様子は、今でも鮮明に記憶に残っています。

地震の後、町はパニックになり、道路は、非難する人や子供を迎えに行く車等で渋滞。人々もどこに非難すればいいのか、どう行動すればいいのか分からない状況でした。

津波が来てからは、もう訳が分かりませんでした。いつも暮らしていた場所は、水でなにも見えなくなり、水につかって震えている人もいれば、歩けずに座っている老人の方もいました。

とりあえず、濡れた人の服を乾かし暖をとるために、火を焚くことになりました。

しかしながら、みんな自分のことで精一杯なのか動きが悪く、まとまりがなかったように感じます。

私達スタッフは、日頃から岩崎先生の指導の下で働いていますので、落ち着いて行動出来ましたし、当たり前のことをただけと感じています。ただ、周りの人よりも気づいて行動出来たのは、普段から先生と生活を共にしていたので、見本となる師が近くにいたおかげです。

陸前高田市にいて被災はしましたが、人間として大きく成長することができました。それが、今回表彰につながったのだと思います。本当に感謝しています。

新しい出会いも、たくさんありました。柔道を通

じて、新しい職場では、院長をはじめ柔道関係者、子供達、そして患者さん方と出会うことができました。仕事をやらせてもらいながら、大好きな柔道も出来、指導も出来る。「本当に恵まれているんだ」と感謝する毎日です。これを当たり前だと思わないように、いつか恩返しが出来ると、日々精進し、仕事に柔道に全力で取り組んで行きたいと思っています。

あの当時は、子供たちの安否や今後のことも含め不安はありましたが、これから生きていく上で、大切なことを改めて思い知らされたいい経験になりました。

これからは、犠牲になられた方たちの分も心にとどめ、感謝の気持ちを忘れず毎日を全力で生きて行きたいと思います。

今回はこのような賞をいただきまして、財団の関係者の皆様、そして推薦して下さった岩崎先生には、心から感謝しております。ありがとうございました。

北田 駿

昨年の3月11日、東日本大震災が起きました。私は柔道整復師の修行のため、岩手県陸前高田市の岩崎健二先生の整骨院に勤めていて、地震発生

時も診療中でした。患者さんもおりましたが全員帰して、私たち従業員も先生の指示のもと高台へ避難することとなりました。

避難した大高台で津波の光景を目の当たりにしましたが、雪もちらつき始めこのままでは大変だということで避難所への移動を始めました。しかし移動する足もとは、一人一人がやっと通れるような細い道で、高台にいた方々の中には高齢の方も多く、なかなか歩くのが困難な方もいました。そんな中、先生からあるおばあさんを背負って避難してくれと指示があり、おばあさんを背中にかつぎ、服でしばりつけて避難所へ向かうこととしました。

私は普段、柔道の稽古をしたりトレーニングをしたりして、体力には自信があったので、そんなに大変なことではないと思っていたのですが、いかんせんとても高齢な方（後で聞いた話では90歳を超えていたとか）でしたので、私の首元に回した腕を組み続ける力もなく、私の背中をずるずると下がっていくので、おばあさんの体を途中何度も先生と一緒に働いていた方へ上げてもらい、私は体をまっすぐにできないまま何十分と歩き避難所へつきました。そこからは来た道に戻り、道の誘導やまた別の高齢者の方に肩をかしたりして全員の避難を確認した後、今度は別の避難所からの布団の移動や電気もつかないので、薪を炊いて暖をとったりしました。

今回の受賞に関しては、私としてはあのような状況下で、若い力を役立てようという思いしかなかったので大変光栄に感じております。

私は現在、地元の秋田に戻り、実家で父と共に柔道整復師として日々、過ごしております。秋田は震災の影響をほとんど受けていないのですが、被災地では復興までまだまだ長い道のりだと思います。被災地に自分自身できることがあれば何でもしていきたいと思ひますし、何よりこれから陸前高田市で過ごした成果をこれからの仕事や生活にいかしていくことが恩返しになると思うので、第二の故郷、陸前高田市を思い続け日々を過ごしていきたいと思ひます。

横山 優士

#### 「追憶の3・11」

東日本大震災から、早くも一年が経過した。しかし、陸前高田市の街並みは、未だに瓦礫は山積みで、残った建物は廃墟であり、無残な光景である。漆黒の津波は、街や人々に深い爪痕と傷を残し

た。

私たちは、砂煙が舞い上がる中で、奥の方から建物が倒壊していく音と共に走り、高台の神社へと階段を駆け上がる事ができた。それは、まるで映画の一シーンの様な逃げ方で本当に良く助かったといえる。もはや、階段の半分は水で濡れ、瓦礫により降りることは許されなかった。

災難は重なり、雪は降り始め、気温は下がり、体力を消耗させた。人々の中には、ずぶ濡れになった方もいれば、薄着の方や高齢者があり、暖をとるために、薪になる木や流れ着いた瓦礫を集め、家の中から廃材や野宿に備えて新しい毛布や布団を運んだ。

岩崎先生に呼ばれ、「神社に抜ける山道がある」と言われた。その道が通れると判り、私はその道を抜けた所で、高齢者は近場の公民館へ、歩ける者は高田第一中学校へと誘導した。

また、歩けない高齢者には横山先生と私とで一緒におぶり、両脇から補助して、無我夢中で公民館まで走り届けた。その方々に感謝の言葉を頂き、微力ながらも力になれたことを実感できた。

大震災による漆黒の大津波という二度と経験したくない貴重な経験をした事により、私の心は精神的にも傷ができた。それは、大津波が迫る恐怖は後々から覚え、亡くなられた方々を思うと、言葉に出来ない悲しみが、込み上げてくる毎日である。

この生き延びることのできた命を、第二の人生と考えて、これからも人のためになるように歩んでいきたい。それが自分なりの鎮魂である。

そして、最後になるが、私を生んでくれた親、兄弟、友人、同僚に感謝する。

特に、東日本大震災における社会貢献者表彰に推薦していただいた院長 岩崎健二先生に本当に感謝する。

岩崎先生は、あの孤立した場所から先頭に立ち、的確な指示のおかげで野宿を切り抜けた。そして、私達も良い形で行動でき、人々を避難させることができた。これは岩崎先生の多少なりとも社会に貢献しようと言う言葉が、私たちにも受け継がれ、実行できたと確信した。

社会貢献者表彰に選ばれた事は、光栄であり、感謝の気持ちでいっぱいである。

本当にありがとうございました。

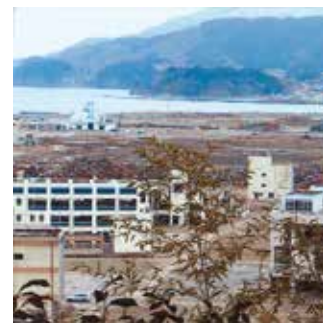
遠藤 新悟



皆が集まった広場



整骨院があった場所



避難した裏山から見た高田市内



避難所へ移動する際通った山道



焚き火をした痕



裏山の途中にある長い階段



## 瀬戸 裕保 (61歳/宮城県仙台市宮城野区)

仙台市の宮城野区で自宅の2階に避難していたところ、津波が押し寄せる中で助けを求める声を聞き、自宅の作業小屋付近に浮かんでいる女性を発見。長女と共に避難ロープを使い女性を救助されました。

● 推薦者 新浜町内会 会長 平山 新悦 / 仙台市宮城野区 ●

多分、去年の3月11日震災直後の16時前後だったと思います。津波で濡れた服を着替えて2階へ避難しホッとしていた時、長女が「お父さん、“助けて!”と言う声が聞こえた」と言うので、北側の窓を開けると、家の隣接する作業小屋の屋根の上あたりに、娘さんが浮かんでいるのを発見しました。

ちょうど足を延ばせば、作業小屋の屋根に足が着くと思ひ、娘さんに「足を伸ばして立つように」と伝えました。それから、屋根伝いに南側に行くようにと声を掛けました。

私は、娘さんが、南側に移動するのを確認してから、2階に常備していた救難用のロープを取りに向かいました。ロープをベランダの手すりに結び付け、娘さんの方にロープを投げ、救出するために私自身が、降りていきました。

娘さんは、だいぶ憔悴していたので、一応、ロープを掴ませ、尻の下にロープを置き、娘さんの臀部を押し上げ、ベランダにいる長女が引っ張り上げる手段を試みましたが、ベランダの壁が高く、思うように力が入りません。長女が、踏み台になる代替品を持ってきてくれて、下からは、私が再度押し上げて、ようやく娘さんを引っ張り上げることが出来ました。

当時、私を含めて家族は4人いましたが、父と母は、部屋の中で待っていて、助かった娘さんの着替えと、カイロを数個身体に貼り付け、寒くないようにしてくれました。

10分後位に「寒くないか?」と聞いたところ「寒い」というので、濡れた頭を拭き、毛布をかぶせました。30~40分過ぎた頃から少しずつ、会話をするようになったので、これで大丈夫と思ひホッとしました。

去年の暮れ頃、友人に「人命救助したんだって」と言われ何か恥ずかしいような、なんとも言えない気持ちになりました。

当初、私達は家が壊れると思ひ、家の前の畑のビニールハウスに避難グッズやラジオなどを持ち込んでいました。ただ何故か、家の中の片付けをしようと玄関に戻ったところ、津波がきて、何が何だかわからないうちに、あの娘さんを助けていました。

今回の災害で、救難用のロープなど防災用品を準備しておくことが、無駄ではないということ、痛感しました。また、人の気持ちのありがたみを改めて感じました。

受賞については、頂いて良いのだろうかと思ひながら手記を書いております。今後は、更に「(周囲の人々の様子を) 気に掛ける事」や「思いやり」を大切に生きていきたいと思っています。



2階のベランダにて



右側の作業小屋の屋根に浮かんでいた女性を救助した



## 櫻井 京子

(73歳/宮城県東松島市)



## 尾形 拓海

(16歳/宮城県塩釜市)

東松島市の小学校の体育館に避難したところ、津波が押し寄せ、あっという間に避難してきた人が飲み込まれ、多くの人が茫然と立ちすくむ中、お二人は高齢者や子供、障がい者など、急を要すると思われる人に傘の柄などを使って救助されました。

●推薦者 櫻井 京子●

平成23年3月11日、突然の強い地震に驚き、一人暮らしの私は、隣人に娘の家に連れて行ってもらいました。そして娘と孫二人でもう一人の孫を野蒜（のびる）小学校体育館に引き取りに向かいました。

学校周辺の方も次々と避難して来ていました。知人もたくさん居ました。

「大きな津波が来る！」という情報があり、私たちは「校舎3階に移動しよう」と入り口に向かったところ、小学校の校門を真っ黒な水が固まりとなり、飲み込む様に越えてくのが見え、「体育館の2階へ！」とあわてて昇りました。

館内に入って来た真っ黒な水は、あっ！という間に渦を巻きながら2階ギリギリまで押し寄せました。とても恐ろしい光景でした。そんな中、中学校2年の孫が、傘を使って浮いたマットレスに乗っている先生などを助け、協力しておぼれている方々を助け上げていました。孫が落ちはしないかと心配していると、どす黒い水の中に二人の知人の顔が見えました。夢中で、孫に助けるように声を張り上げ、すこしずつ上がってきた知人をまた、おちないように私も微力ながら引き揚げました。もう一人の知人も何

とか助ける事ができました。

このように多くの方々協力して救助活動をされていたなかで、私と孫が表彰していただいたことでとまどいもありますが、この度は本当にありがとうございました。

そしてあの場で犠牲になられた方々のご冥福を祈り続けたいと思っています。

櫻井 京子

今度、この表彰をされる事になり、とても嬉しい反面、僕以上の人命救助をされた方を思うと戸惑いを感じていますが、本当にありがとうございます。

震災で津波が来た時、僕と母、祖母、弟二人は野蒜小体育館に避難していました。そして、避難しておよそ10分後に体育館入口から津波が来たのが見え、館内にいる全員は2階へと急いで避難しようと登りました。ですが2階に上がるためには階段が一箇所しかなく、大変混雑していました。

ほとんどの人たちは2階に登ることができましたが、お年寄りの方や車椅子の方などは、遅れてしまい登ることができずに溺れてしまった人がいました。実際、僕が助けた人は多くがお年寄りの方たちでした。

津波が2階までできてしまうのではないかと焦りましたが、水位はだいたい体育館の2階ギリギリで止まり、一時は安心しました。

マット運動のマットが浮いていたり、流されてきた瓦礫などが浮いていましたが、ステージ側では津波で溺れている人が、カーテンに掴まっていた。

その時、目の前に浮いていたマットにしがみついていたお年寄りが二人いて、マットを何とか引き寄せ助けました。助けるときは、服などが水を吸っているのもとても重く、特にお年寄りなので、力任せに引き上げてしまうと骨などを折ってしまう危険性もあり、一人を引き上げるのはとても大変でした。

ですが、とにかく水から救い出すために力をいれて助けました。水位が足元付近だったため、浮いている人も助けやすくそれだけでもだいぶ楽でした。もし2階付近まで来なかったら、あの時助けた人を助けられなかったかもしれません。

水が引くまでかなりの時間を要し、度々来る大きな余震などで、恐怖心が煽られ、怯えていました。

その後は、だんだんと水位が下がって来ま

したが、完全に水が引く頃には、すでに午後9時を回っていた気がします。

同時に、亡くなってしまった人達も次々目に入ってきました。暗くてよく見えませんでした。おそらく5～6人ほどはいたのかもしれませんが、水がひいたため、体育館から校舎へ移動しました。50mほどの距離の道なのですが、瓦礫が押し寄せ、歩くのも大変でした。

流れ着いていた車の上を登ったり、暗い中足場も悪く危険でした。お年寄りと子供は危険ということで、大人の人達で背負って行ったりしながら移動させており、僕も同じように背負って手伝っていました。全員移動させ終わった頃には、午後11時近くになっていて、疲れが出てきたので眠りました。

1時間ほど寝て、起きたあとは助けたお年寄りにありがとうと感謝され、助けてよかったと思いました。

その後、3階にいたので外を見ましたが、いつも学校は通っていた道すらわからないほど瓦礫が押し寄せ、家々も跡形もなくなって、大きな衝撃を受けました。

現在は、震災以前の生活に近づきつつある日々を過ごしていますが、まだ困難な部分などもあります。ですが、この故郷野蒜、そして東北が必ず復興できると信じ、支援してくれた人たちに感謝しながら、自分にできることを見つけ、更なる復興へ取り組んでいきたいと思っています。

尾形 拓海



園長 八木澤 弓美子

## 社会福祉法人 大槌福祉会 大槌保育園

(岩手県上閉伊郡大槌町)

地震後、迎えにきた親御さんに70人の園児を引き渡した後で、津波に襲われました。43人の園児を、保育士などと台車にのせるなどしながら、必死に山の斜面を登り避難しました。避難所で園児と3日間をすごし、親御さんの元に全員を帰すことが出来ました。

●推薦者 公益財団法人 社会貢献支援財団●

### 3.11の記憶～子どもたちとすごした日々～

大槌保育園がある岩手県上閉伊郡大槌町は、太平洋沿岸北部、沿岸南部のほぼ中間にあり、リアス式海岸の景観が美しい町だった。東日本大震災と津波で街の52%が壊滅的な被害を受け、震災前に15,277人だった人口は、1月31日現在で死者802名、行方不明者479名。これは岩手県全体の死者・行方不明者のおよそ21.5%を占めている。

3月11日 午後2時46分

年度末の3月。卒園に向けての準備や新園児面接の準備など、普段と変わらない生活。こどもたちは午睡から目覚めたばかりだった。

小刻みにかたかた揺れはじめ、その揺れはだんだん大きくなっている。園庭を見ると大きく地割れしていて、「これはただごとじゃない！」と直感し、準備ができたクラスから直ちに避難するよう指示した。

当時わが園は、0歳児が11名、1歳児が16名、2歳児が17名、3歳児が26名、4歳児が16名、5歳児が27名の合計113名。0歳児は、給食担当の栄養士や調理師、支援センターの職員にも避難時の応援をお願いしていた。避難訓練の時にはいつも「足が痛い」「靴が脱げた」などと言うこどもたちも、その時は真剣に走り、独自に地域の方たちから聞いて津波避難場所と決めていた高台にあるコンビニへと急ぎ向かった。

無事コンビニに到着して、迎えに来てくれた保護者の方に子どもたちを渡していると、「あれ、火事!？」と遠く沿岸に見える水門付近が砂煙で茶色に変色している。「あっ、電信柱が倒れている!」平行に並んだ電信柱がつつぎつつぎにゆっくりと倒れていくのが見えた。「津波だあ!」「この場所も危ない、ここより高い所にいこう!」必死で走っていると、ゴォ〜!バキバキバキ〜!今まで聞いたこともないような爆音と共にものすごい勢いで津波が迫ってくる。「がんばって!先生のそばにいれば大丈夫だよ!」と子どもたちを励ましなが



園児を乗せて斜面を登った

らながら叫び、子どもたちを背負い、急斜面を四つんばいになって懸命に登った。

やっこのことで登った山頂でも余震が断続的に起き、気温も下がっていく。急斜面で足をふんばり、子どもたちを囲んで暖を取る。「怖い」と「寒い」の連続で本当に不安だっただろう。大槌の街が、いや、日本が沈没していくのかもしれないと思うほどの大惨事を眼前にして不安な反面、「この子たちを何が何でも助けなければ…!」と強く思っていた。

明るいうちに山を下り、市街地から広がってくる火災を避けて、避難所にたどり着く。差し入れおにぎりの嬉しかったこと。子どもたちも美味しそうにほおぼっていた。しかし、余震と寒さで一時も気の休まらない時間が続く。その晩は、不安がる子どもたちを足の間に入れたまま座って過ごし、ほとんど一睡もできなかった。

自らを責める日々

震災から3日目、私たちと一緒に過ごしたこどもたちを、全員無事に保護者の元へお返しすることができた。迎えに来たお父さんやお母さんが「良かったあ!生きてくれたあ!」子どもたちの顔を見るやいなや、泣きながら抱きしめる姿を見て、私たちもホッとした。

しかし子どもたちの安否確認をする中で、9名の子どもたちが保護者と共に行方不明になっていることを知る。遺体の検索や安置所を巡る中で、変わり果てた子どもとの再会…。「なんで津波が来る前に返ってしまっただろう。自分がもう少し早く状況を確認していれば、一緒に逃げたはず…」深い悲しみと絶望に襲われた。もう仕事は辞めよう、保育園の再開など無理だと思っていた。

そんな中、ばらばらになっていた職員たちと震災後、初めて再開した時の安心感は忘れることができない。「園長一人が抱えることじゃない」とってくれたあたたかさ身に染みだ。悲しみを分け合い「私だけが、苦しい思いをしていたんじゃない」と思えた瞬間、「よし!前を向こう!」と思うことができた。

「先生!いつ保育園やるんですか?」「待っていますね」、「命を救ってくれてありがとうございます」こんな保護者さんからの温かい言葉にもたくさん支えられ

た。

保育園を再開する

津波に遭った園舎の泥だしを職員が苦勞して行い、再開を急いだ。しかし行政からのストップがかかり、日本ユニセフ協会の全面的な支援のおかげで、6月に仮設プレハブ園舎で保育再開を果たすことができた。

前日、職員たちに「子どもたちには本当のことを伝えませう。そして、みんなで一緒に乗り越えよう」と、天国に召された子どもたちの事を伝える決意を伝えていた。そして登園初日。子どもたちは、真剣に私の話を聞いていた。年長児7名はしっかりと理解し、涙を流していた…。

環境が変わったこともあり、はじめは落ち着かない様子の子も多かったが、日々の職員との関わりの中で時間をかけて、3か月分の信頼関係を取り戻していった。「お外が怖い」といってお散歩が困難になったり、お絵描きの時間になると「描きたくない」という子もみられるようになり、職員と大人でも精神的に回復するのは時間がかかるから、「あせらずゆっくりと向き合っていこう」と話した。そんな中、「保育園楽しい!」と言って登園してくる子どもたちの笑顔に何度も救われた。

震災から月日が経つにつれ、子どもたちの心にも変化が見られていった。10月中旬に親子遠足を計画した時、一人の子が「行かない」と言い出した。みんなで話し合おうということになった。すると、子どもたちの口からはじめて亡くなった友だちの名前が出はじめ、全員で泣きながら「自分たちが頑張ればお空から応援してくれるんだよ」と…。私と担任は、「今、この時、この子たちと正面から向き合わなくては」とじっくり話をすることにした。

「なんで津波が来たんだろう」と一人の女の子が語りだし、「園長先生が、Tちゃんたちにお家へ帰らないで!って言えば良かったじゃん!」はじめてぶつけてきた本心。「きつと、大切なものを取りに行っただと思う。Hちゃんもお家に大切なものあった?」「うん…。あったよ…。あのね、七五三の時に綺麗な着物を着て撮った写真…。でも流されちゃった…」、「そっか…3歳の時は1回だけだもんね。でも7歳でも着られるよ。きつと、Tちゃんも大切なものを取りに行っただね」。そう言うと、「Tちゃんに会いた〜〜い!」と言って、私に抱きつき大声で泣いた。六歳の子が、こんな事を思っていたなんて。気づかないふりをしていたのは私たち大人の方だった。「先生も会いたい…」子どもたちに会いたい!一緒に大きな声で泣いた。泣くだけ泣いたら、今まで互いにかぶっていたベールがはがされていくような気持ちになった。

遊びのなかでくりかえされる「津波ごっこ」も、乗り越えるために大切な遊びであること。大人が自分の本当の気持ちから逃げれば、子どもも逃げる。大人が嘘をつけば、子どもも嘘をつく。保育士として、大人としてあるべき姿をしっかりと子どもたちにみせていくことが、震災を乗り越える原動力になると、子どもたちから教えられている様な気がした。



仮設プレハブ園舎

「生かされた命」を守る

「天災は忘れた頃にやってくる」、「備えあれば憂いなし」、「津波でんでんこ」…パソコンや携帯電話、ビデオなど記録手段のない時代に、先人たちがなんとか後世に残そうとした<想い>は、東日本大震災を経験した私たちの心を揺さぶる。しかし、長い年月の間に人はその思いを忘れ、記録は風化し、またそこに家を建てたり、何もなかったかのようにふるまう。「どうせここまでは来ない」、「また注意報で終わる」しかし、自然の脅威はそんな生易しいものではなかった。

ことさら乳幼児を預かる保育園では、大人が的確に誘導しなければ救うことはできない。あらゆる想定を組んだ避難訓練を積みかさね、自分の園がどの様な立地で、子どもの足では何分で避難できるのかを確認し、一人一人の意識を高めていく必要がある。

この「生かされた命」をどの様に守るべきなのか。大切な子どもたちや友人を亡くして、あらためて考えさせられることだ。

「最後まで孫と娘に愛をいっぱいくださってありがとうございました」亡くなった園児のお祖母さんが、私にかけてくださった言葉である。

私たち保育士の仕事は、今すぐに答えを出るわけではない。毎日の積み重ねの中から幼心に宿る種は、いつか大きな花へと開花するに違いない。その大輪の花をみるまで、この世から旅立ってしまった6名と、未だ見つからない3名の大切な子どもたちの分まで、目の前にいる子どもたちに沢山愛情を注ぎ、成長を見守り、力強くたくましく、大人になって「この大槌に生まれて育てて良かった」と、自信を持って言える子どもに育てていきたい。

職員や保護者と共に支えあい、助け合いながら復興に向って一步一步前進することが何より供養だと心に誓いながら…。

今回、この様なありがたい賞を受賞するにあたり、とても迷いましたが、すべては、全国から支えて下さった皆様と、共に歩んで来た職員に感謝の気持ちを伝えたいと思

い、受けることを決めました。

本当にありがとうございました。

大槌保育園園長 八木澤 弓美子



津波を受けた園舎





## 瀬戸 巨 (39歳/宮城県仙台市宮城野区)

仙台市の宮城野区で、瓦礫の中から女性を救出。また所有する重機を使って自衛隊と連携し、道路整備などに不眠不休で取り組まれました。

● 推薦者 新浜町内会 会長 平山 新悦/仙台市宮城野区 ●

3月11日作業中に強度の震度に襲われ、これはただ事ではないと直感し、地域消防団員の一人として使命感に燃えて自宅に戻り、バイクを出して地域住民への避難を仲間の団員と一緒に、懸命なる呼びかけを行いました。住民の多くは、ここには津波が来ることはないと言ったとして動こうとしない方々が多数見受けられました。その中に我が両親も入っていました。

団員と最後の打ち合わせ中、海岸の松林の上を津波が押し寄せて来る光景を見て、団員は個々に避難行動を取りましたが、私は両親が家に居る事を察知し、バイクを飛ばしながら二階へ上がることを指示し、運良く間一髪で一命を取りとめることが出来ました。

今まで宮城県沖地震、チリ津波と被害が無く、安心感があった様に思われ、また関係自治体も津波に対する常日頃の訓練も全く無く、連絡網の不備もあり津波に対する認識不足があったようです。

余震の続く中、妻と子ども三人の安否を心配しながら、両親と三人で我が家の二階で海面の中、全壊した二階で一夜を過ごし、翌朝当たり一面を見渡すと、瓦礫の山々で見ると無残な光景でした。これが本当の津波の爪痕なのかと言葉にならなかったのが現実でした。

ふと気がつく救助を求めている方々が多数おりました。瓦礫の中から救助を求めている方、二階から助けを求めている方など様々でありましたが、私は危険を顧みず先頭に立って救助活動を行いました。その中に足の不自由な方もおりましたが、無事救出作業を行い家族の元へ送りました。その時の感動は私の人生にとりまして、脳裏に鮮明に残ることでしょう。本当に良かったと自分を褒めております。

又、基幹道路が瓦礫の山々であり、これらを撤去しなければ地域復興は不可能と感じ、親類より重機(バックホー)を借り、自衛隊員と連携を取りながら懸命の救出活動



を行いました。なにせ、世帯数135軒という小地域ではありますが、60数名という方々が尊い命を落とされました。その中に避難救助活動を行った仲間の団員も含まれております。残された妻や幼い二人の子どもの事を思うと断腸の思いで一杯でありました。

私たち生かされた者として何をすべきかと考える時、感謝の気持ちを持ち、先祖代々脈々と続いたふる里を一日も早く復旧復興することが、亡くなられた方々に対する最善の供養と信じ、我が家も全壊いたしました。父親共々全力で心からの作業を行いました。その中で一番困ったのは、重機に入れる燃料の不足であり確保に困難を極めました。その後、地域の方々より感謝の声が届き、自分ながら反応の大きさびっくりしております。

現在、当地区は危険区域対象外となり、我が家は安心してリフォームを行い、今は快適な生活を送っております。仮設住宅、借り上げ住宅へ住んでおられる方々や地域復興に燃えている方々と移転希望者との温度差があま

りにも開きがある様に思われます。

移転して生活するのもいいが、多額の金額が要するという事を冷静に考えるべきではないだろうかと思えます。

当地区では住民が安心安全の街づくりのために、海岸堤防築造TP7.2m、そして内陸部へ防潮堤TP6.2mと二重の防御と避難道路の整備、避難建物の建設など着々と国、県、市が一体となって取り組んでおります。近い将来は、防潮堤に桜の苗木を植え、日本各国から若者が集う行事などの企画運営を皆で取り組んでいき、そして住んでみたいと思う様な地域作りに私どもも協力していきたいと思っています。

受賞に対して大変感謝しております。私どもよりもっともっと貢献している方々が多数おられると思いますが、この様に素晴らしい社会貢献支援財団があるということは全然知りませんでした。

本当にありがとうございました。



多くの犠牲者が出た宮城野区





## 永井 舞 (18歳/宮城県仙台市宮城野区)

仙台市の宮城野区の自宅2階で避難していたところ、津波を受け流木につかまって流れてきた男性を発見。車の屋根に移るよう誘導しましたが、弱っていく様子を見て、泳いで男性を救助。自宅に引き上げた後、暖を取らせるなど、介抱されました。

● 推薦者 新浜町内会 会長 平山 新悦 / 仙台市宮城野区 ●

平成23年3月11日午後14時46分、大きな揺れが始まったとき、私は自宅の屋根裏部屋にいました。少しの間身を固めて揺れが収まるのを待っていたのですが、揺れが収まることは無かったので、下の様子を見に行くことにしたのですが、見るも無残な光景でした。

外には逃げまどう人たちや車や家具、さらには家がまるごと流されていました。次々と家中の窓が割れ、瓦礫やヘドロが一気に流れこんできました。しばらくすると揺れが落ち着き、家の中が静まり返ったので、ポーッとしていると人の声がしたので、トイレの窓から覗いてみると一人の老人男性が流木にしがみつき、「助けてくれ!」と何度も何度も叫んでいました。

私は声を張り上げ、近くに浮いていた車の上に誘導しました。外は雪が降っておりとても寒かったので、家中にあるタオルや毛布などかき集め、老人に受け渡そうと何度も投げました。老人の手に毛布が届いたときには、老人も私も寒さと疲労で限界に近づいていました。正直もうあきらめていま

した。また少し経つと今度は「もうダメだ…。死にたくない! 生きてくれ!」と今にも消えていきそうな枯れ果てた声が聞こえました。

かける言葉も見つかりませんでした。私の頭の中で「生きて!」という言葉がぐるぐる回っていました。そのまま救助を待っていたって助かる可能性はゼロに近いし、ここで今助けに行かなければ絶対に後悔すると思い、私は「今助けに行きます! 絶対に助けます。だから諦めないでください!」と声をかけ、家の窓から飛び降り泳いで老人のところへ向かいました。

老人はガクガクと震え、既に呂律も回らない状態でした。老人を背負い波に流されながらも、少しずつ大きな瓦礫などにつかまりながら家に戻りました。やっとの思いで家に着き、老人の着替えをさせ暖を取ろうと思ったのですが、あるものと言えば毛布一枚。老人はパニック状態なのか未だに「死にたくない、死にたくない」と呟いていました。「もう大丈夫ですよ。きっと助けが来るはずですから」と励ますものの、不安

で不安で押し潰されそうでした。毛布で老人の背中をさすり続けました。屋根に登り、残ったわずかな充電の携帯のライトを手に必死で空に向かって合図し続けました。

気が付くと周りは明るくなっており、私はベランダに倒れていました。その時「誰かいますか? 救助にきました! 誰かいますか? いたら返事してください」。やっと助けに来た、やっと家族に会えるとホッとしたと同時に力が抜け、涙が溢れてきました。救助されてから3日後にやっと家族と会うことが出来ました。

この後、誰かに会うたびに「救助したんだってね、凄いね」、「よく頑張ったね。偉いね」と数え切れないほど言われました。褒められるのは嬉しいのですが、その反面私には悔しさもありました。

もっと早く行動することができたら、もっと多くの命を救うことが出来たんじゃないだろうか…。流されてきた老人の近くには、他にも数人流されてきていた様なのですが、私には一人救助するだけで精一杯でした。もっと体力があれば…勇気があれば…今もまだ後悔

しています。

救助活動したのは私だけではありませんし、私以上に活動した方は数え切れないほど居るはず。ですから受賞させて頂いたことは、とても誇りではあるのですが、私よりももっと受賞にふさわしい方がいたのではないかと思います。

今回の震災で多くの犠牲者が出てしまいました。ですが、今回の震災を通して感じたこと、考えさせられたことがあります。

### 東北人の絆

- ・人を思いやる大切さ
  - ・協力することの大切さ
  - ・家族や身内の大切さ
- そして改めて“命の重さ”

もっともと感じたことはありますが、普段の何気ない生活が小さな幸せでは無く、とてもとても大きな幸せだったんだと気づかされました。

当たり前のことですが、大切な家族や人を大事にしていこうと強く思いました。

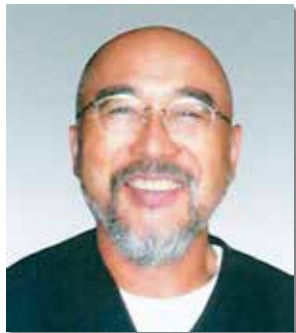




**磯谷 與藏**  
(77歳 / 岩手県大船渡市)



**袖野 勇**  
(81歳 / 岩手県大船渡市)



**故 志田 壽昭**  
(享年59歳 / 岩手県大船渡市)

3人は大船渡市の県道で、車ごと津波に巻き込まれた男性をロープで車の窓から救助しました。  
●推薦者 大船渡市漁業協同組合●

その日は確定申告のため、大船渡の市街に居りました。そこであの大地震に遭いました。今まで経験したことのない大きな揺れで、一緒に申告に行った受賞者でもある袖野さんと二人、軽トラックで自宅（対岸の赤崎町外口）に急いで戻ることにしました。帰路は海岸に面した道路でしたが「まずは家へ」の思いが強く、とにかく自宅へと急ぎました。半分ぐらい走ったところで海面を見ると、既に水位が上昇しており津波が押寄せてきたことに気づきました。一刻の猶予もないと判断し、今来た道をもどり高台につながるわき道へ避難、その際も若い女性が運転する車両を先に登らせ、道路まで浸水する中その後に続きました。

車を安全なところで止め海の様子を見ていると、その波の中に首だけ出した人を見つけました。その人を助けようと近所の家からロープを借り、その家人と同乗者の袖野さんの三人で救助にあたりました。ロープを投げ、引き上げようとしたのですが、ロープが絡まりその人まで届きません。ロープをほどいて再度投げました。幸いそのロープが届き三人で引き上げることが出来ました。

助けた人は、偶然にも同じ地域の人でした。ずぶ濡れだったのでロープを借りた家人から、着替えを借りて三人で山を歩いて家を目指しました。車の通れる道路は津波により通行できないので、とにかく山伝いに家へ急ぎました。暗くなり辺りの様子もわからない上、山道なので迷いながらも何とか家に着きました。

しかし、電気・水道等ライフラインが遮断されていたので、地域公民館での避難を余儀なくされました。公民館では同じく避難している地域住民とともに、命拾いした幸運に感謝しながら過ごしました。

この大震災で多くの人が辛い目に遭いましたが、一年半が過ぎた今、前向きに「あとは良くなるだけ」と信じて、日々瓦礫撤去作業に汗を流しています。

今回、貴財団より表彰していただき、身に余る栄誉です。実際には私より表彰に値する救助活動をされた方は大勢おられます。その方々の功績に敬服しつつ、この賞の重みをありがたく受け止めていきます。

磯谷 與藏

平成23年3月11日の15時40分頃、私たちが救助した志田繁夫さんは大地震発生後、急いで軽トラックで大船渡町から赤崎町長崎の自宅へ向け帰宅途中でした。

志田さんは、大船渡市赤崎町永浜の県道9号線にさしかかったところで、大津波が進路方向右から襲来するのが確認されたので、直ちに停止し車外に出ようとしたところ、車ごと津波に巻き込まれました。

強烈な津波に車ごと流されようとしたところを、たまたま付近に避難していた磯谷與藏さん、志田寿昭さん及び私の3名で、要救助者にロープを投げ込み協力し、車の窓から引き揚げ救助いたしました。

決して、一人では行動出来なかったと思いますが、今回の人命救助活動による表彰を受ける事になり、大変光栄に思っております。

袖野 勇

社会貢献者として受賞された事を、大変光栄に思っております。

但し、非常に残念な事に、本人が受賞式に出席出来れば良かったのですが、奇しくもその震災より、丁度一年後の平成24年3月11日に病により生涯を閉じる事になりました。

父の、とった行動に対して称えて頂くことを、大変ありがたく思います。

父に代わって、厚く御礼申し上げます。

故・志田 壽様 ご長男 小松 新様より

桜の美しい季節となりました  
東日本大震災から一年過ぎました。

平成23年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0の大地震は大津波となって大船渡に大きな爪痕を残しました。

兄は大船渡市内で大工の作務中に地震に遭遇、車で母が一人いる自宅に向かいました。家に着いてすぐに、下の道路に立って「津波くっからこっちさ上げれ、早やく上げれ!」と叫んで、7台の車を自分の家の高台に上げたそうです。1台の車はそのまま走って行ってしまいました。その直後、津波が押し寄せたそうです。

津波で流されてきた軽トラックが木に引っかかり、兄は軽トラックの運転席にいる人に向かって

ロープを投げ、そのロープに男の人が捕まりましたが、津波でぐるぐると巻かれたので、兄は頑張っ引張って引張ったそうです。それを見ていた母は、男の人が死ぬかと思ったそうです。

それから、そのまま走って行った車は、津波が来て流され近くの梅の木の所まで来ました。兄は「早くドアあげろ」とさけんでドアから女の人を引っ張り出して、自宅へ連れて行き、着替えさせました。

兄は更に、1回目の津波で家の天井まで浮かび、泥だらけで濡れた近所のおばあさんを2回目の津波が来る前に、「ばあちゃん90歳にもなるのに重でえなあー、おれ腰がいたぐなった」と言いながら、背負って自宅に連れてきたそうです。同じように濡れて泥だらけになったおばあさんの息子も自宅に来ました。このように兄は、4人を救助したそうです。その後、また濡れた4人の子どもたちが来て、寒い寒いと言ったので、母が4人の子どもたちに毛布を1枚づつかけてあげたそうです。

それから電気も水も止まり、夜からは15～16人でローソク避難生活が始まり、こたつで暖を取り、食事は家にあるものを食べさせたと、母が言っていました。一番長く避難生活をした親子は、15～16日間いたと兄と母から聞きました。その後兄は、私を心配して自転車を借りて私を探しに来る途中、また津波が来たので借りた自転車を担いで、大船渡市立赤崎中学校の高台に逃げたそうです。その後、私を探すのを諦めて山道を通って家に戻ったそうです。

翌日3月12日、また私を探しに早朝に家を出て、山道をと三陸鉄道を歩いて、カメラアホール、大船渡病院、リアスホール、盛小学校を尋ねて、最後に大船渡市役所でやっと私に会うことが出来ました。私も兄の顔を見て泣いてしまいました。兄は私の顔を見て「無事だったなあ! ああ疲れだあ!」と言ってその場に腰をおろしました。家から片道3時間40分もかかっていたそうです。

救難活動した時の様子を兄と母から聞いて書きました。周りの方々は「4人もの人を助けて、自分が一年後に亡くなってねえ…、なんと言っているか…」と母に言ったそうです。

兄は平成24年3月11日午前8時9分、59歳で亡くなりました。

故 志田 壽昭様 令妹 上野恵子様より



## 渥美 広実 (52歳/宮城県石巻市)

石巻市で勤務中、津波を受け家族を捜し歩く途中、木や屋根にしがみ付き助けを求める女性や子供などにロープをくわえて泳ぎつき救助し、またボートを使い水に入るなどにより10名近くの人を救助されました。

●推薦者 阿部 時子●

3月11日、その日は勤務する山西造船にてドックの中だった(船の点検)。船底にいた時、激しい揺れに襲われた。海面を見ると、50～60cmも水が引いていた。2日前にもあった地震の時とはあきらかに違い、必ず津波が来ると直感した。幸いにもその日は、たまたまドックの駐車場ではなく、岸壁に車を止めていたので、急いで飛び乗り車を走らせた。自宅に向かう途中、3回も波の危険にさらされたが、なんとか蛇田地区の弟の家に着いた。その時点で大街道にいる妻と孫の安否の確認がとれず、弟宅から自転車を借り、大街道方面に向かった。4時頃だったと思う。

カメラのキタムラ近くの真山堀のあたりに着いた時、我が目を疑った。あたり一面海と化していた。これ以上は行くも来るもできない。この状態では妻も孫もダメだろうとあきらめて帰ろうとした時、自転車が盗まれているのに気づいた。しかしその日は雪が降っていたため、盗まれた自転車のタイヤの跡がついていた。それをたどって走って行くと、ちょうど真山堀の向うの松林あたりに避難していた人が大勢いた。一人の女性に、この辺はどのあたりかと尋ねると「ちょうど釜小の裏あたり」だという。その時偶然高校の時代の先輩に会った。その先輩に「あの木にすがっている子ども二人、なんとか救助出来ないだろうか」と言われた。

見ると目の先に子どもが二人が入ってきた。助けるしかないと思い、ベルトを持っている人にベルトを借りてズボンをおさえ、Tシャツ一枚になって水の中に入って泳いだ。ガレキ、車が流れてくるその中で一人を抱き陸にあげ、もう一人も迎えに行った。二人救助して安心して陸に上がった時、「助けて、助けて…」と何人もの声が聞こえる。雪が降っているため、あたりは薄暗く良く見えなかったが、車のヘッドライトで照らしてもらおうと、数十本ある木に大人が何人もすがって助けを求めている。

子どもなら抱きかかえて泳げるが、大人は無理だ。「誰かロープをもっているひとはいないか？」大声で叫んだ時、近くで働いていた作業員の方がロープを持ってきてくれた。「誰か泳げる人はいないか？」と叫ぶと若い男性

が「泳げる」と手をあげてくれた。その男性に向うの木まで泳いでロープを結んできてほしいと頼んだ。だがロープの結び方が悪かったため、セーので引張った時にロープがほどけてしまった。

これではダメだと思い、口にロープをくわえ水に飛び込んだ。船員のため一通りロープなどの結び方は知っていた。木々にジグザグにロープを縛り、それを頼りにひとりひとり木にすがっている人を救助した。若い女性を救助しようとした時、一緒に救助していた若い男性が「おんちゃん、この人なかなか水に飛び込もうとしない！」そう叫んだので、もう一回対岸へ向かい若い女性の体にロープをくくりつけ、目つぶって飛び込むように促した。それでも動こうとしないので、「このままでは死んでしまうぞ」と大声で叫ぶと女性は「おじいさんも助けて！」と言った。見るとそのおじいさんはすでに亡くなった様子で水中に沈んでいた。

女性はおじいさんの襟首をつかんでいたが、手を振りほどこき「おじいさんはあきらめろ！」と手を放すように言い聞かせた。そして岸の人たちにロープを引いてくれるよう合図した。女性が無事に岸にたどり着くことが出来たので、安心して自分も岸へ向かおうとした時、また女性の「助けて、助けて…」というかすかな声が聞こえてきた。照らしていたヘッドライトの見える範囲には、その声の人を確認することが出来なかった。大声を出して「どこにいます！」と聞き返した。すると女性は「木に車が引かかっている、その屋根の上にいる。今にも車が沈みそう…」といった。

200メートル程先の大きな松の木の辺りかと思当をつけ泳ぎだしたが、ガレキに阻まれなかなか前へ進むことが出来ない。なんとかたどり着くと驚くことに女性三人と七カ月くらいの乳飲み子だった。この子だけでも助けたいと思ったが、自分一人では救助は無理だと思い、「ボートなどが無ければ助けることができない。必ず助けに来るから動かずじっとしていろ」と伝えて急いで岸へ戻ろうとした。しかし二度三度とガレキに足をとられなかなか這い上がる事が出来なかった。

このままでは自分も沈んでしまう、と何度も思った。そんな中でも何とか岸にたどり着いた。そして岸にいた人たちに向かって「誰かボートを持っている人はいないか？ボートがないと助けることはできないんだ！」と叫んだ。すると一人の男性が、ボートを持っている人を知っているというので、貸してもらおう頼んだ。10～15分ぐらいだと思おうが、その待っている時間が長く思われた。

ボートが着いて乗り込もうとした時、協力してくれた一人が、だいぶ長い時間水にはいっているのだから、あとは俺

たちがやるから、火にあたって暖をとれとストップをかけられた。自分自身も限界を感じ、あとは任せてその場をあとにした。

まだ妻と孫の安否の確認がとれないため、次の日もまだ夜が明けぬ前に

昨日の場所に行った。そこで昨夜のこわれかけているボートを必死に直しているおじさんがいた。偶然にも顔見知りだった。そのボートを応急修理して二人で釜大街道方面に向かった。先に釜にあるおじさんの家族の安否を堪忍したが出来なかった。その後、自分の妻と孫の確認のために大街道方面に向かった。

自宅に着いたが二人は発見できず、次の場所にも二人は発見できず、次の場所に行こうとした時、隣の鉄工所の社長さんに「アパートの屋根に女の人と子どもがいる」といわれた。見ると近所の奥さんと子どもだった。二人を屋根から降ろして救助したが、ボートは穴があいて、水が入って来ているため、大人二人乗るのがやっとで連れて行くことが出来ない。しかたがないので、ちょうど近くで二階に避難していた二人を預かってもらう事にした。

昼頃、大街道小学校で避難している妻とようやく再会した。孫はひと足先に長男が連れて行ったと言う。ひと安心し妻をボートに乗せ、先に来た道順通り戻ろうとした。ところが途中で「助けて、助けて…」と女の子のか細い声が聞こえてきた。見上げると屋根の上に女の子がいた。その脇と近くにいた、女性と思われる二人が見えたので「大丈夫か？」と呼びかけても応答はなかった。

女の子を救助に行こうとしたが、ブロック堀に上がっても高さが思った以上にあったため、上ることが出来なかった。その時、とび職風の男性が身軽に屋根に登って女の子を救助してくれた。屋根から降ろしたところで、その子の父親が自分の子であると駆け付けて来て「自分は屋根にいる二人を何とかしなければならぬ。この子は釜小に行けば先生方がいるので釜小に置いて行ってほしい」といわれた。だが、ガレキで各道路がふさがっているため「釜小に寄れば日が暮れてしまうので、このまま来た道を戻って、この子は自分たちと一緒に弟宅まで連れていく」と父親に告げた。

妻と救助した女の子を連れて蛇田方面に歩いている時に、途中で知らない女性が駆け寄ってきて「おじさん、昨日は助けてもらってありがとう。あの時、最後に助けもらったのは私です」と声をかけられた。翌日女の子は父親のもとへ帰って行った。

自分は3月11日から12日、その場の状況に遭遇し、救助を求めている人を見て見ぬふりが出来なただけで、自分は船員という立場と経験を活かし、判断して当然やるべきことをしたまでだと思っている。

そして、あの時の場所に居合わせた名も知らない人たちが協力してくれたことで何人かの人たちを救助できたので、その方々にも感謝しなければならぬと思う。

ただ残念なことに、他にも大勢の人が助けを求めているが、



土手から下全体が湖のようになっていた

その人たちを救えなかった事、流れてきた遺体の上にパレットをのせてその上で救助活動をしたことが今思ってもそればかりが心の残りである。

亡くなった方に心からご冥福を祈りたい。

追伸

何十人もの人に協力頂き、互いに名前もわかりません。さらに個人名、会社名はふせておきますが、のちにご協力いただいたかたに、偶然再会することが出来ました。彼なしには誰一人として救助できなかったと思います。

17～18名の生きられた方々の倍以上の助けられなかった方々、本当に心から申し訳なく思っています。

弘子夫人より

この度は、社会貢献者表彰の賞に選考頂きまして本当にありがとうございました。

主人は、平成24年2月8日に仕事1年という長航海に出航いたしました。

私は、2歳4ヵ月になる孫と工場港に近い自宅で東日本大震災にあいました。あの時の記憶は、家の中のものが何ひとつ倒れなかった事、それしか覚えていません。多分、私の父の教えて、「地震の時は、逃げ道を確保しなさい」と言う事でサッシを開けておいたために、大きなサイレンと大津波が来るという防災無線が聞こえて来たのだと思います。警報が解除になれば家に戻れると思い、孫と飼犬をつれて歩いて10分位の小学校に避難しました。その時、携帯電話を持たなかったために、主人とも家族とも連絡がとれず、大事(おおごと)につなげてしまいました。

主人は、海と化した自宅方面を見て、私たちを諦めたといっておりました。そこで、助けを求める子供さんや数人の方々に遭遇したそうです。

主人は漁船員で、ベーリング海の極東の海の他、世界各地の海を航海し、危険な海を知っていました。「海へ飛び込むと衣類は重くなるのでシャツ1枚で入水する事。それからほどけないロープの結び方、これらは、救助する際に大変重要な事だった」と、船員の経験を生かし、それが何人かの命を救う手助けになったのだと思います。

「最後の方は、自分もはい上がれずダメかもしれないと思った。」と言われたときは、自分の危険を省みず人命救助という大役を成し遂げた主人は、私が今まで思っていたより偉大な人に思えました。

今回、この候補者として応募するのも本人は、「そもそも、その場において当たり前的事をしたまでだ」と言って遠慮していました。そして、「その場に居合わせた多くの人達の協力のもとで、これだけの人達を救助できた。それから、もっともっと救助を待っていた人々がいたのに救えなかった事が悔しい」と何度も言っておりました。

この東日本大震災を体験して思うことは、「ここまでは津波はこないだろう」という過信が大悲劇を生んだのだと思います。大きな地震が来たらすぐ高台へ逃げる事、そして警報が解除になるまでは絶対に戻らないことをずっと言い伝えなければならぬと思います。

最後になりますが、あれから1年、亡くなられた方々や行方不明の方々に心からご冥福をお祈り致します。



瓦れきや車や原木、遺体が重なり合っていた場所



**太田 幸男** (47歳/宮城県仙台市太白区)

勤務先の名取市関上の名取市サイクルスポーツセンターで被災しましたが、早速、災害対策本部のボランティアとして関上小学校や中学校等、孤立した被災地へ向かい1700名の救出に協力されました。

●推薦者 社会福祉法人 みずほ●

## 「2011.3.11 14:46 あの時から全てが変わりました。」

この度の受賞に当たり大変嬉しく思っております。

私の活動そのものが、名取市災害対策本部ボランティアという通常の活動での参加ではないので、決して表に出ることはありませんでした。私にも守るべき家族や支援すべき仲間、お世話になって来た方々が犠牲になる中で、名取市関上地区の人命救助から始まり、非常に過酷で大変な状況の中、一人でも多くの命を救おうとして、またせっかく助けた命を消すことないよう、今回の震災対応の活動に、全身全霊、全ての力を使い精力を注いで参りましたが、評価されることはありませんでした。

自分の個人的な身の回りの事が出来たのは、名取市長が市役所の市長室に寝袋で宿泊しなくなった4月28日からでした。それ以降、夜間対処要員は輪番制になり、災害対策本部職員も初動に必要な最低人数での対応に変更になりました。徐々に市役所機能を回復させていた状況でした。

ある程度、震災対応が落ち着いたので、私の家族にもそうですが、仲間やお世話になって来た方々に対し、連絡をとり訪問もしました。しかし、今回の震災時の行動を説明しても、納得いただけない現実に直面しました。連絡しても連絡を頂けない人もいらっしゃいます。今もそうです。

何故なら、震災時大変だった時に、誰も私の身近な人達を助けてあげなかったからです。その時、私は名取市災害対策本部ボランティアとして活動していて、一生懸命名取市の被災者の方々に支援していたからです。

普通では有り得ない話なので信じてもらえないのです。「馬の耳に念仏」の状態でした。その時、非常にショックを受けました。被災者支援で命を削って一生懸命活動しました。100日法要の翌日に倒れました。十二指腸潰瘍になっていて、血液が半分なくなっていました。入院中、今まで自分を理解してくれている人々、支えてくれている人々に理解してもらえない。そういう自分がいることを実感しました。

今日のこの席に、「最初で最後の親孝行」と言ってお母様を招待いたしました。その理由は、母も私の活動を理解してもらえなかった一人だからです。この賞を通じ、少しでも自分の活動が身内に理解されることを期待しています。

また、今回の震災を通じて多くの事を学びました。一つ目は信念が大切であるという事。「誰の為にやるのか?」でした。私は、今までお世話になった、故今井末吉・洋子夫妻。故高橋史光名取市議。故沼田喜一郎名取市議を初めとする関上の方々とその家

族の為に行動しました。決して、自分の家族や身内のお世話になった方々に対する活動ではなかったのです。でも私は、私が他の地区で人助けをしているから、きっと誰かが助けてくれていると信じ行動していました。結果、支え合い助け合い、困難な状況を克服していました。

二つ目は、声を出す事。自分から率先してやってみる事。駄目ならすぐ修正する又は違う方法を考え行動する事。良かったら皆に呼び掛け協力してもらおう事。

三つ目は、出来るだけ多くの人と情報を共有する事。そのために、世話役を見つける事。情報の伝達をスムーズに行く組織系統を作る事でした。

他にも色々ありますが、省略致します。

震災後、多くの支援及びそこから出会いがありそして絆が生まれました。この場をお借

りして、名取市にご支援頂きました、国内、国外全ての方々に厚くお礼申し上げます。お陰様で早い復旧を果たせました。ただ、復興に関しては、ようやく動き出したばかりです。農業再生、企業再生等仕事の再生支援に引き続きお力を頂きたい。そうすることにより生活再建が進む事と思います。

何卒、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

名取市に対する復興の支援窓口は、微力ながら私の方でも調整いたしますので、ご相談いただければと思います。宜しく願い申し上げます。

最後に、今回受賞者として、ご推薦いただいた森精一先生。そして、活動を共にした災害対策本部の方々、私の災害対策活動を承諾して頂いた佐々木一十郎(いそお)名取市長には心から感謝申し上げます。



自衛隊に救助される被災者(斎藤正善氏撮影)



震災翌日の名取関上地区



## 木村 光善 (42歳/埼玉県戸田市)

震災発生後直ちに埼玉から被災地に向かい、海水と瓦礫の中孤立する家の中で震える老女を発見救出しました。また毎週のようにボランティアとして被災地を訪れ、自宅近くの八百屋の商品を、幾度も自費で全て買上げ支援物資として供給されました。

● 推薦者 小林 直樹 ●

3月11日。  
勤務中に大きな揺れ。

ラジオでは東北、関東で大きな地震があり、大津波警報を繰り返し叫んでいる。とにかく北へ。名取市には連携している障害者支援のNPOもある。すぐに仕事を片付け、水、食料など救援物資とチェンソーなど救助工具を積載し、4号線を北へ。土砂崩れなどで迂回を強いられながら、深夜3時頃名取市に到着し、仲間の無事を確認。新潟の災害救援隊風組とも合流し、日の出と共に閑上地区に救援に入る。

見渡す限りの瓦礫と水。

夜通し道路開通し、湯気を上げている重機、遠くにはコンビナートが爆発し大きな

黒煙が見える。車を捨て歩くと、あるお宅の前でおばあちゃんがずぶ濡れのまま横たわっていた。自衛隊や消防からも見落とされていた。目の前が瓦礫の山で担架もない。しかしこの気温では長く持たないかもしれないと思い、私がおばあちゃんをおぶって、風組が目の前の瓦礫を掻き分け、500メートルほど離れた場所にいた救急隊に引き渡しました。

私が救助をしていた頃、次々に到着した仲間がガソリンの供給や炊き出しなどをしていました。仲間のバックアップがなければ出来なかった活動であり、感謝すると共に、共助の大切さを改めて感じた震災でした。



ずぶ濡れのおばあさんが取り残されていた



救助したおばあさんを救急隊のもとへ運ぶ

閑上地区の被害状況



**鎌田 真人** (53歳/宮城県本吉郡南三陸町)

南三陸町で開業していた医院は全壊流失。ご自身も避難所生活をする中で、ようやく持ち出した医療器具と薬で、無償で被災住民の診療にあたりました。3月15日からは整骨院を借りて、町内唯一の民間診療所をいち早く開設し、現在も巡回診療に従事されています。

●推薦者 社団法人 気仙沼医師会 会長 大友 仁●

### 「3月11日のこと」

あの日の夜の闇の中、応急に設置された石油ストーブに照らされた薄暗い天井を見上げ、私はこれから先のことを考えた。あの日の午後、大津波に襲われ命からがら歌津中学校体育館に避難し初めての夜であった。幸いにも母親と診療所スタッフ、その時に診療所にいた患者は無事に難を逃れて皆、無事であった。

その時にはまだ被害の実態を確認したわけではなかったが多分、自宅も診療所も流出し、この町に住むことも、診察することも不可能であろうと思った。手元に残った医療道具は往診鞆とAEDのみ。レントゲンも心電図も注射も薬剤も、何もかもないのだ。これでは診療は不可能であり医者として仕事が出来ないと思った。

私は勤務医時代を過ごした大阪での就職を考えていた。厳寒の薄暗い体育館で、一緒に逃げたスタッフに「ここでの診療は、もう無理。それぞれが一人一人で生きていくしかない」、「俺は大阪に戻る」などと自分の考えを伝えた。皆の顔は青ざめ不安に打ちひしがれており、私の話に返す言葉もなかった。私は翌朝、仙台から通勤していて共に体育館に避難した薬局のK先生と共に仙台に行き、それから大阪に行く計画を立てた。

その夜は津波で全身が濡れ低体温症の患者さん1名の診察と、電話で大腿裂傷の患者が出たが診れないかとの問い合わせが1

件あったのみと記憶している。初めての夜は意外に静かで恐ろしく寒い夜であった。多分皆、自分の目で現実を見るまでは映画の1シーンのような、あるいは夢の中の出来事なのではとっていたに違いない。

翌早朝、朝日が昇るのを待って一人、体育館を抜け出して診療所に向かった。何人かの人たちとすれ違ったが、皆「これはひどい」、「もうだめだ」と絶句して通りすぎた。私も急ぎ足で町に向かったが、瓦礫の山で町どころか駅にさえも辿り着けない。これが現実で、夢なんかで決してないことを確信した。

朝になり、ざわついた体育館に戻ると町の保健担当者から、3キロほど北にある平成の森アリーナに出産予定日の妊婦がいるから診てくれと頼まれた。産科の経験はない。しかし、この町の医者は私一人しかいないので断る訳にはいかない。幸いなことに体育館に産科経験のあるベテラン看護師がいて同行した。妊婦はまだ陣痛もなく破水もしていなかった。私は保健担当者に、もし陣痛を起こしたり破水を生じた場合、ヘリコプターでかかりつけの気仙沼市立病院へ搬送するように告げ、瓦礫の中、仙台に発つべく体育館へ急ぎ戻った。

ところが一緒に向かうはずのK先生はすでに体育館を出て、仙台に帰った後だったのであった。私は目の前が真っ暗になり、同時に頭の中が真っ白になった。しかし、そうこう間もなく患者さんが私を見つけ次々

寄ってきた。往診鞆にあった聴診器を血圧計が唯一の診療道具であったが、冷たい体育館のフロアで私は慌ただしく診察をこなした。

訪れる患者さんは私と同じ被災者であり、同じ立場である。その患者さんの安心した顔を見ると次第に「ここで医者をやる以外の道はない」と思うようになった。さらに「やる以上はトコトンやるしかない」と思った。昔の言葉で言うなら、恐らく「退路なし進軍あるのみ」だと。さらに、ここで逃げたら「もう医者ではない」とも思った。仙台も大阪もなく、診療所も医療機器も失ったが、ここ南三陸で医者をやっていくと決めた。

それからが大変で、注射も薬もない、検査も出来ない、でも患者がいる限り私は医者として、ただベストを尽くす。それしかない。3日後、元接骨院が被災を免れたと聞き、昼はそこに移動した。昼は接骨院で診察したが、夜は相変わらず体育館で診察した。接骨院は場所が歌津地区の中心なので各地区から来る患者を、夜は体育館の患者を診た。もちろん昼夜にかかわらず救急車で搬送される患者は全部診た。幸いなことに避難所、仮設診療所での死者はゼロであった。

その後、奈良県医師会から派遣された先生方が来られて、私は体育館での連続日当直を外れた。やがて接骨院に昼夜ステイするようになり、やっと通常診療を再開した。ナースや事務員は、いやな顔ひとつせず交代で当直に付き合ってくれたが、体育館で連続当直は4月まで続いた。現在も元接骨院跡の仮設診

療所と同じ場所で、2011年3月15日より継続して診療を行っている。

### お礼の言葉

昨年、歌津八番クリニックに改称し同じ場所で診療を続けていますが、それも当診療所のスタッフの協力と奈良県医師会の応援、さらには歌津薬局はじめその他大勢の皆様のおかげであり、心より感謝しております。またこの度、表彰して下さった社会貢献支援財団の皆様にご礼申し上げます。

### 最後に

われわれ生き残った被災者は、今回の津波で命を失われた多くの方々に比べれば、まだ幸せであり、泣きながらでも前に向かうしかありません。全国、全世界の方々にはこれからも、この被災地の、悲しみの中から復興していく我々の姿を、決して忘れることなく見守っていただければ幸いです。



鳥越 紘二 (72歳/宮城県塩釜市)

塩釜市で平成16年に災害時医療救護検討委員会を設置。対策を啓蒙する講演会を毎年実施し体制を整えてきました。震災発生後には現場で指揮を執り、塩釜地区の救護活動に尽くされました。

● 推薦者 社団法人 宮城県医師会 会長 嘉数 研二 ●

## 「私の東日本大震災」

鄙びた岩手でのんびり育ったのにも拘わらず、若い頃から予感力が強く、いろいろな事象で今迄それが証左されて来ていました。それに加え31年前、医院を開業してからは靈感も感じ、さもない縁の人の安否が夢に出るようになりました。

35年前の夕刻、宮城県沖地震を当時勤めていた病院で体験したことから、大災害(地震、津波)がくることは、私には確信となって来ていました。宮城県塩釜医師会大災害医療対策本部長として、それらに対応するため6年前から、大地震を体験した大阪府立病院救急部長や新潟中越地震で医療と避難所巡りを行った庭山医師会会長を当地へお招きして、その実際の経験談の研修を地元医師会員や消防、市職員と一緒に聞きました。

更に塩釜市、多賀城市、松島町、七ヶ浜町、利府町の自治体と大災害時の協定書を結び、医師会員を5班に分け二次救急病院を決め、診療可能な医院、病院には黄色の旗を立てるよう1.2m四方の布を配布し、他府県の医療班と地元のそれを区別するため緑色の塩釜医師会のジャケットを配りました。個人的には、米30袋、レトルト食品、乾パン、カップ麺などの食料品、石油ストーブ6基、ポリタンク1ダース、練炭ストーブ、蠟燭、懐中電灯等を6年間とり換え

ながら用意していました。

実際に地震、津波がきたとき、七ヶ浜町、多賀城市の被害が大きく松島町、塩釜市はそれに較べ多くの島々が防波堤となり死亡者は少なかったのです。当院も津波は玄関まで来たが、床上まで来ず、電気、ガス、水道は止まったが怪我人、被災者を受け入れました。

3月13日から、塩釜市7カ所、多賀城市2カ所、七ヶ浜町2カ所の避難所を回り、体調の悪い人、病気の人へお薬を手渡し、脱水症の人には車で医院まで運び点滴注射をして、骨折の人も同じく手当をして避難所へお送りしました。

これは私の医院が院内処方でお薬があったからできたことで他の医院、病院は院外処方のところが多く、処方箋だけでは薬局に行く手段が無く、また薬局も被災し閉じていることが重大な問題でありました。

避難所の塩釜市立第三小学校、第三中学校では13日もおにぎり1人1個で暖房は体育館に石油ストーブ1個と寒いなか、空腹で我慢している姿を目にし、若者はイライラしており、胸がつまりました。ガソリンが無く本部との連絡もできないなか、各市職員は不眠不休で頑張っているのも、印象に残りました。

このように避難所を巡ることができました

のも、日頃お付き合い頂いた方々がプロパンガス、簡易トイレ、発電機、毛布、更に笹かまぼこ、パン、お菓子、飲料水、お魚、刺身などの食料をすぐ差し入れしてくれ、入院患者、職員、避難者への食料、暖房など後方の憂いが無く、活動出来たおかげと心底より感謝しております。

岩手の中学時代の同級生や縁者、山形の大学時代の同級生から大量のお肉を届けて頂き、ありがたく心に染みております。また、疲れが溜まった3月19日の連休に遠く新潟県の魚沼医師会から上村・布施両先生が応援に来て下さり、心から感謝している次第です。

今回の大災害では、その人その人の人間性、価値観、倫理観、人生観があからさまにみる事ができました。また、これをお互い

乗り越えることにより、戦友のように心に相通ずるものができ、親戚、家族を亡くした人、家を流された人、職場を失った人の心の傷が痛いように分かり、患者、医師に垣根を越えて話を聞くようになりました。

この震災の急性期が落ち着いた時、南三陸町の腎臓の悪い患者13名が医師ともども頼ってこられ、4月からは急遽人工透析を始め、今も5名が譲り受けた医院の隣の家に住んで頂き治療している次第で、今回の震災の影響は、まだまだ長く続きそうです。

千年に一度と謂われる大震災、大津波の避難や、体調をくずした人、けがの人に天の時、地の利、人の和とその準備で役立てたことは、医者冥利につき神様、ご先祖様に深く感謝しているところです。



新潟県医師会の災害医療支援チームの方々と一緒に



院長 今田 隆一

## 財団法人 宮城厚生協会 坂総合病院 (宮城県塩釜市)

これまでも災害拠点総合病院として訓練を重ねてきましたが、震災後は全国から集まった医療関係者2443名の陣頭指揮を執り、入院患者の対応、避難所での診療等、行われました。

● 推薦者 社団法人 宮城県医師会 会長 嘉数 研二 ●

### 「東日本大震災に対する坂総合病院の取り組みを振り返って」

あれからもう1年が経過しました。今でも患者さんに震災のことを少しずつ聞いています。すさまじい経験をされた方も数多くおられ、ひとつひとつのお話に胸が痛みます。

さて震災の発災後の状況を私は5期に分けて考えています。津波に襲われた直後は建物、道路、工場、鉄道、破壊されて街の原型をとどめていませんでした。広範囲にわたってライフラインが障害・途絶されていたほか、各所で火災が発生し、被害をひろげました。ガソリンが極端に枯渇したほか、双方向の通信手段も衛星電話やMCA無線などごく限られたものだけであったため、多くの地域では情報の点からも孤立し、各地域は救急車の到達できる範囲どころか人の歩いてい

ける距離の範囲に局限された医療の提供ができるだけでした。この時期に問題となったのは津波による直接的被害である溺水、巻き込まれ外傷、低体温症などで、震災後3日ほど続きました(第1期)。当院では通常診療を行わず、トリアージ体制を敷いて対処しました。

その後、双方向の情報のやりとり、ならびに救急隊の日常の活動が可能になるにつれ透析や在宅酸素治療を受けている患者や、慢性疾患や日常生活活動能力障害患者の重症化、肺炎などの併発症への対応が主となっていきました(第2期)。結局、救護活動させていただいた患者さんは第1期と合わせて2,400件にものぼりました。

避難所が整備され、医療支援が組織的



系統的に行われるようになってから避難所生活における生活環境の変化や制限によって発症する疾患が増えてくるようになりました(第3期)。病院も通常診療を再開し、避難所への医療支援を精力的に行いました。

やがて避難所の中の医療ニーズも次第に介護ニーズなどに変化し、また多くの住民は仮設住宅へと移住していきました(第4期)。避難所への医療支援のみならず、仮設住宅への支援も開始しました。

現在はほとんどの被災者は自宅か仮設住宅への移転が完了、日常生活が徐々に戻ってきています(第5期)。医療ニーズもほぼ通常と変わりなくなりますが、PTSDなどのストレス障害のような精神科的心理的ケア対象の方が多くなる時期であり、病院としてもその取り組みをしています。

坂総合病院は地域医療支援病院であり、かつ地域災害医療センターです。一方、臨



床研修指定病院でもあるために、今回の震災にあたっては多くの若い医師の疲れを知らない不眠不休の活躍が不可欠でした。

発災後三日目に緊急地域連絡会議を保健所長、医師会長にお願いして開催させていただきました。振り返って大変よい仕組みであったと感じています。

さて被災地では復旧・復興はこれからの印象です。私たちも地域への支援の継続、そして本格的な復興へのお手伝いをしなければ、と思っております。

この間、全国からたくさんのご支援をいただきました。また今回は表彰の荣誉に浴することもできました。職員を代表して感謝の意を表明したいと思います。職員一同、これからも元気に頑張っております。

坂総合病院  
院長 今田 隆一



病院のスタッフと





院長 舩 眞一

## 社団法人 石巻市医師会

(宮城県石巻市)

会員や家族にも多くの犠牲者が出ましたが、地震発生後、無線網を活用し災害対策本部と連携、直ちに避難所への巡回医療を開始するなど医療活動に尽くされました。

● 推薦者 宮城県石巻市長 亀山 紘 ●

## 東日本大震災における貢献者表彰を受賞して

この度、石巻市長・亀山 紘様からの御推薦を頂き、公益財団法人社会貢献支援財団様の「東日本大震災における貢献者表彰」を石巻市医師会が受賞しましたことに対し、会を代表しまして御礼申し上げます。まず、簡単に、石巻市医師会が行なった医療救護活動についてご報告し、現在までのその他の活動についても言及させていただきます。

昨年3月11日、大地震そして大津波が石巻市を襲いました。小生の医院も津波で床上浸水の被害を受けました。震災当日は、医師会館と簡易無線で連絡を取り、会館内の状況を聞き、人的被害は無いことを確かめました。翌日早朝、会館周囲が冠水した中(写真1)、何とか会館に入り、事務局長以下10名ほどの職員に迎えられました。彼らは、津波のため会館内に閉じ込められ、

一夜を過ごさざるを得なかったと報告を受けました。

館内への浸水こそありませんでしたが、電気、水道、ガス、電話などのライフラインは全く断絶した状況でした。早速、職員に手分けして会員の医療機関に赴いて、安否確認と今後の救護活動の依頼をするよう指示しました。道路は壊れた家、自動車、船舶などで遮断され、瓦礫が散乱しており、蓋の取れたマンホールも有り、非常に危険な状況の下、職員はよく働いてくれました。その時点では、職員の家族の安否や家の被害状況も不明でした。石巻市とは平成22年に、災害時医療協定を結んでおりましたので、市役所の水没状態の回復を待ち、3月13日に市役所へ行き、担当者で相談し、医薬品の調達や救護チームを派遣する避難所の相談をしました。



石巻高校での救護活動

翌14日から、医師会チームとしての救護活動を行ないましたが(写真2~5)、それ以前から、独自の判断で、避難所での医療活動を行っていた会員が少なからずおられました。電話が回復するまでの市役所や、職員、救護チームとの連絡には、医師会および会員が災害用に購入した簡易無線が大いに役立ちました(写真6)。しかし次第に、当地の災害拠点病院である石巻赤十字病院へ全国から派遣されたDMAT、JMATなどの救護チームと避難所でかち合うことが多くなったため、宮城県災害医療コーディネーターである石巻赤十字病院の石井先生と相談し、当会の救護活動は順次縮小し会員医療機関の早期再開を目指すことになりました。

しかしその後も、当会副会長の4人の御兄弟をはじめとして、しばらくは、救護活動を続けられた会員もおられました。結局、5月初旬までの間、会員医師および看護師(当医師会付属の准看護学校や訪問看護ステーションなどの看護師を含む)延べ435名がこの活



石巻高校での救護活動

動に参加しました。避難されていた患者さん方は、はじめの頃に十分な医薬品が無くても、顔なじみの医師やかかりつけ医に軽い診察を受けただけで安堵し満足されたと聞いております。

その後、医師会としては、災害検視や災害弔慰金等支給審査委員会、被災して壊滅した石巻市立病院の再建などに協力している状況です。

今回の震災では、当会に所属する医療機関の実に8割以上が、全壊、半壊などの被害を受けました。会員も2名亡くなり、家族を失った職員も多くいます。そして、11の医療機関が閉院となりました。その様な状況の下で協力してくださった会員そして職員にとって、今回の受賞は、大いなる喜びと励みになるものであります。本当にありがとうございます。

社団法人石巻市医師会  
会長 舩 眞一



3月11日午後4時 医師会周辺



3月11日午前11時 石巻高校での救護活動



5月1日 石巻高校で救護活動の合間に



役立った簡易無線





会長 丹野 尚昭

## 一般社団法人 名取市医師会

(宮城県名取市)

震災直後から救護所や急患（センターなどで、会員が自発的に診療を開始。大手病院と連携を取り、避難所を巡回診療、多くの検死にも立ち会われました。

●推薦者 一般社団法人 名取市医師会 会長 丹野 尚昭●

### 「東日本大震災における貢献者表彰を受賞して」

電話、ファクス、メールが全く通じない状況で、名取市内の幾つかの診療所は自発的に診療を継続しました。大きな病院は外来を中止して救急のみに対応しているようなので、多くの患者さんの受け皿がないであろうと考えられました。普段は、土日曜と休日の名取市休日夜間急患センターを、平日も開いて診療することが大切と考えました。宮城県立がんセンターの医療チームの応援を頂き、震災翌日の12日から27日までの16日間で1,058名の患者さんの診察を行ないました。同時に、市内で30か所以上あった避難所全てを、宮城県立がんセンターと宮城社会保険病院の医療チームに巡回診療していただきました。

この間に、幾つかの診療所が再開の準備をし、短時間ですが診療にこぎつけた診療所もありました。12日からの一週間は、検案の依頼があり、毎日2-3名の会員が協力しました。3月27日からは、病院の先生方は平常業務に戻り、名取市医師会会員が避難所の巡回を担当し、避難所が最後の一つになった5月27日まで、ほぼ毎日巡回を継続しました。沿岸部の3人の診療所が全壊状態、1人の診療所が一部損壊で、1人の医師が亡くなりました。数個の診療所が損壊し、診療不能となりました。こういう状況でも、十数名の医師が避難所の巡回を続けました。避難所の市民からは、地元の顔を知っている先生が定期的に来てくれることで、安心

感と信頼感があったとのうれしい評価を頂きました。そのせいか、3月11日から4月末までに、宮城県内の避難所から救急車で病院に搬送された人は2,149名でしたが、名取市ではわずか47人で、他地域の6-16%にすぎませんでした。

現在、名取市の仮設住宅には、日本訪問看護振興財団の看護師の方達が入って、市民の血圧測定、相談等の健康管理を行なっています。血圧が上がってきたり、不眠を訴える方も増えています。宮城県立精神医療センターのチームが仮設住宅の市民の「こころのケア」を行なっています。医師会は、この2つのチームと連携して、高血圧、脳梗塞、感染症等の健康講話で協力し市民の健康維持に寄与しています。

病院の医療チーム、急患センターのスタッフ、避難所の応援の保健師さんやスタッフの方、養護教諭の先生方、市の保健センター等、多くの方々との協力、連携があっはじめて、震災時の医療が可能でした。多くの御支援を頂いた国民の方々に深謝致します。

医師会の活動が記録に残る、表彰されるなどとは考えも及ばず、また記録する余裕さえありませんでした。毎日の活動で精いっぱいでした。故に、写真は殆んどありません。御容赦下さい。

名取市医師会  
会長 丹野 尚昭



総長 西條 茂

## 地方独立行政法人 宮城県立病院機構

### 宮城県立がんセンター

(宮城県名取市)

名取市休日急患センターへ2週間、医療チームを派遣し、救急患者1,000人以上の診察にあたりました。センターでは24時間フル稼働で救急患者への対応や、避難所への巡回診療にあたられました。

●推薦者 一般社団法人 名取市医師会 会長 丹野 尚昭●

### 「大震災後の地域医療支援について」

このたびは栄えある賞をいただき、宮城県立がんセンター職員一同、大変嬉しくまた光栄に存じます。これを機に医師会および行政と連携し、災害時医療における役割を果たすべくより一層努力していきたいと思えます。

当時の状況ですが、地震直後、患者さんや建物および設備の被害状況の確認が始まり、同時に外来処置室を救急患者診察室として、院内外からの急患対応とした。ロビーのテレビからは、名取市閉上地区が津波にのまれていく悲惨な光景が映し出され、わずか3-4km先で大変な事態が進行中であることが知れた。

間もなくロビーには、避難者が集まってきたので、身元確認などの受付業務とともに寒さ対策などの対応が始まった。

病院の対策が一段落した後、名取市休日・夜間救急センターへ行き名取市の医療体制について情報を得ると、医師会の各診療所は、海沿いのいくつかの診療所が津波で流され、そのほかの診療所も機材の倒壊や職員が被災し、当分は診療不能との説明を受けた。

この状況を乗り切るには、がんセンターのマンパワーを活用するしかないと考え、がんセンターの役割を、まずは24時間対応とする。その間休日、夜間急患センターを利用し毎日の診療をがんセンターが担当する、急患センター受診が難しい避難者のための避難所への巡回診療を行う、さらに避難所と急患センターおよび医療機関を巡回

する市バスの手配と名取市に協力してもらうことに決めた。

この結果、急患センターでは、県立がんセンターの医師3名看護師4名薬剤師1名計8名のチームが、連日診療にあたった。

ここでの診療は土日も含め3月27日まで2週間続いたが、この頃になると、当初120名程いた受診者数も20名前後と減少し、各診療所を診察が再開できたことが確認され、当初の目的を達成できた。

一方、避難所への巡回診療は、がんセンターの医師2名看護師3名薬剤師1名を1チームとし2チームで、また宮城社会保険病院のチームとも連携し、震災翌日から連日2週間行われた。

また、震災直後には、研究所の先生3名が、学校の体育館で行われている検死に参加している。現在、名取市で約900名の死者・行方不明者となっている。

今回の経験から、大震災時には、通常の通信手段は遮断されること、超急性期の救急医療は地元完結型でしかできないことが解った。

そしてこれらの反省から、医療関係者は、災害の状況に応じて、どこでどのように医療活動をすべきか、たとえ指示がなくても自ら判断し行動できるような現実的マニュアルと、それを実践できる体制づくりを、行政とともに作っておくことが必要と考えている。

宮城県立がんセンター  
総長 西條 茂



院長 石井 元康

## 社団法人 全国社会保険協会連合会 宮城社会保険病院

(宮城県仙台市太白区)

病院には震災当日、市民370名が避難。翌日から被害の大きかった名取市等の避難所への巡回診療を開始。24時間体制で医師看護師職員総出で患者の受け入れをされました。

●推薦者 一般社団法人 名取市医師会 会長 丹野 尚昭●

### 「東日本大震災報告」

3月11日14時46分から震度6強の地震が3分余り続きました。当院は震度7の耐震構造でしたので、4か所の配水管破壊による漏水はありましたが倒壊は免れました。

地震直後、病院のライフラインがすべて停止し、非常用電源のみで病院機能が維持されました。当院は海岸線から5kmに位置しています。東部道路（高さ8m）が防波堤となり、津波は当院に2kmまで迫って止まりました。通信機能は全廃し“陸の孤島”と化しましたが、全国社会保険協会連合会より援助物資が届き、病院活動が維持できました。重油供給依頼、テロップ放映依頼、電力供給依頼にガソリン不足の中奔走しました。水道水は2日後、電気が3日後、非常用電話が6日後、ガスが6日後に使用可能と

なりました。

地震直後から3日間は主に被災者の救急対応にあたりました。外傷、骨折・捻挫、低体温が主でしたが、3月14日には救急対応を要する患者数が減少したため、15日から避難所巡回を開始しました。避難所の多くは学校体育館であり、校長先生はじめ学校教員が対応にあたっていました。特に海岸地区は津波被害が大きく、地元の診療所医師は被災の中での避難所巡回で、疲労が極限に達していました。

初期は外傷治療のほかに、津波による常用内服薬流失の対応が必要でした（写真：当院医師・看護師・薬剤師・保健師・事務員がチームになって動いた。医師が薬や体調を避難者から聴取して、隣にいる薬剤師



医師、看護師、薬剤師、保健師、事務員がチームとなって動き、避難者の体調や薬を聴取した



が必要な薬剤を病院に取りに戻り、服薬指導を行った)。避難所での地元医師会の活動と他県からの救援医療チーム活動は地震後1週間過ぎ頃から始まり、お互いに協力しながら避難所巡回を行いました。

2週目からは、慢性疾患を有する避難者の病状悪化、アトピーや喘息の悪化と避難所の感染症が問題となり、とくにインフルエンザと感染性腸炎の治療そして避難所の感染防止対策が必要でした。人工肛門管理指導にも皮膚排泄ケアの認定看護師があたりました。長引く避難所生活で精神ケアが必要な人もいました。約2週間で避難所の感染症が収束して、地元医師会に引き継ぐ形で避難所での医療活動を終了しました。巡回施設数は延べ72施設、避難所診察患者数は258名でした。

通信機能が回復してから崩壊した医療機関の入院患者受け入れが始まりました。精神科疾患の患者さんも含まれ病棟の混乱が危惧さ

れましたが、全国の社会保険病院から看護師と介護福祉士の応援派遣をもらって有害事象もなく対応できました。

3月は紹介患者数、紹介率、逆紹介率、紹介患者数いずれも激減しました。12月にはようやくそれぞれの数字が回復してきましたが、近隣の人口が減少しており、完全に地域医療が回復するには地域復興と相まって時間がかかると考えられます。いまだに外来で涙ぐむ人を見うけられます。

今回の大規模災害の場合、私達も含めた地域の人々は全国からの援助を受けながら、できることを一生懸命やってきました。その総体としてようやく復興しようとしています。この度の名誉ある受賞を地域の代表として頂ける事を感謝しております。

宮城社会保険病院 石井 元康





看護部長 田中 一美

## 独立行政法人 労働者健康福祉機構 関西ろうさい病院 看護部 (兵庫県尼崎市)

看護師9名を、石巻市及び気仙沼市の避難所に100日、災害支援ナースとして派遣。被災者の衛生環境、必要な物資、人的支援に関する情報を看護協会対策本部に提供されました。

● 推薦者 社団法人 兵庫県看護協会 ●

此のたびは、当看護部の活動に対して社会貢献賞表彰という栄誉を賜り、誠にありがとうございます。団体としての受賞は、被災地に赴いたスタッフだけでなく、人員の欠けた部分を相互に補いながら、仲間を快く送り出した看護部全体が評価されたものと受け止め、一層うれしく思っております。

3月11日のあまりにも悲惨な光景は多くの方々に「何か自分にできることはないのだろうか」という思いを抱かせたと思います。当看護部でも同様に多くの看護師がその思いを私に伝えて参りました。特に私どもは阪神淡路大震災の際に多くの方々に助けていただいた経験があり、その恩返ししたいという思いで一杯でした。病院機能の維

持、スタッフの身の安全と保障、家族の了解、有効な災害支援手段、このキーワードで災害支援にスタッフ派遣する手立てを考えている時、兵庫県看護協会から災害ボランティア派遣の要請をいただきました。

関西広域連合と兵庫県医師会この2つの災害支援チームに同行させていただき、4月8日から7月30日の期間、述べ13名のスタッフが延べ105日間災害支援にあたらせていただきました。

気仙沼の避難所で初期の救護支援と後期の自立支援をさせていただいた梅野晶子の活動報告を以下に紹介いたします。

『被災地には神戸からバスで18時間かけて向かいました。気仙沼市総合体育館ケー



現地保健師との情報交換

ウェブは、多くのボランティア団体や日本看護協会や陸上自衛隊、他県からの事務職員など多くの団体で組織されていました。それらのスタッフで気仙沼市の職員、保健師、看護師を支え、避難所運営のサポートを行いました。

避難所での医療者の主な役割は、避難所にある居住スペースの一面に設けられた健康相談室での避難者の健康問題への対応です。健康チェックを通じて、避難者が抱える心の不安や体調不良、食事の偏り、生活不活発病のリスクなどを把握しました。

医療者ミーティングを2回/日実施し情報共有と現状把握に努めました。生活の場である避難所で健康問題への介入をどこまでする



全体ミーティングの様子

かは議論の分かれるところであり、今後の課題と感じました。また多くの団体が日々入れ替わりながら協働する場では、より早期に明文化したルールを作ることが必要であると学びました。

今回の災害支援活動を通じて、支援活動は非日常的なことですが、日々の実践がそこに活かされることを痛感しました』(梅野)

今回の受賞を励みとして、災害支援活動への積極的参加に一層の取り組みを行うとともに、平時においては災害支援看護師教育に尽力し、有事に備えていきたいと思っております。

関西ろうさい病院 看護部  
看護部長 田中 一美



気仙沼健康相談室の案内



健康相談の問診



避難所での健康チェック



兵庫県看護協会支援チーム 県協会長とともに



看護部長 山中 誉子

## 医療法人財団 姫路聖マリア会 姫路聖マリア病院 看護部 (兵庫県姫路市)

延べ155名、170日にわたり20名の看護師を災害支援ナースとして石巻市に派遣しました。兵庫県医師会や薬剤師会とともに救護所の立ち上げや、避難所の環境改善に取り組み、気仙沼市では、心のケアや在宅避難者の訪問活動にも取り組まれました。 ●推薦者 社団法人 兵庫県看護協会●

姫路聖マリア病院看護部では、災害発生4日目の兵庫県看護協会派遣要請に迅速かつ継続的に対応し、3月から6月にかけて170日間にわたり、延べ155名の看護職を災害支援ナースとして被災地に派遣した。

兵庫県看護協会・医師会・薬剤師会が共同で石巻中学校に診療所を開設し、周囲の避難所の巡回診療を3月21日～6月19日まで行った。当院の看護師は、3月23日から2名ずつ連続して3班派遣した。大震災から約2週間経過していたが、慢性疾患の患者の増悪が顕著で健康管理については、手つかずの状態であった。

診療所の環境整備・避難所の環境整備・診療介助・慢性疾患患者のフォローなど行った。活動中はチーム医療の大切さと行政・避難所となっている学校の教師、他のボランティア団体との連携の大切さを感じ

た。またライフラインや支援物資、避難者の数など日々変化する状況の中、情報収集と情報共有の重要性を感じた。

気仙沼市では、行政関係者と共に4月2日から避難所支援を行った。総合体育館・階上中学校・鹿折中学校の生活環境の整備や避難者の健康チェック、異常の早期発見に努め医療班へつなぐなどの活動を行った。また周辺地域の地図をたよりに一軒一軒訪問し、家族の安否や健康状態・不足している支援物資について、確認していった。

「自分だけではなく皆がつらいのだ」という思いが、支えにもなっているし、不安やショックを表出しにくい原因にもなっていると感じた。また阪神大震災を経験した兵庫県から、長期にわたって支援に入っていたため、感謝の言葉を聞く事が多く、その気づかずに私達が元気をもらう事が多かった。



当院は、キリスト教の理念に基づき、他者のために、必要とされる時に迅速に対応することを使命としている。災害支援ナースとして、「被災地の役にたきたい」という思いを実行に移せたことは、姫路聖マリア会のバックアップ、兵庫県看護協会関係者の皆様および共に災害支援活動を行なったチームの皆様や被災地の皆様の支えとご協力によるものと、心から感謝いたします。

今後も様々な形で支援活動を継続すること、当院の災害支援看護師の増員と教育の継続を図り、社会のお役に立てる看護職であるよう努力して参ります。

姫路聖マリア病院 看護部  
看護部長 山中 誉子



阪神淡路大震災を経験した兵庫県からの長期支援には、多くの感謝の声が伝えられた

